

平成 26 年度 奈良 ASP ネットワーク  
第 3 回 ESD 子どもキャンプ  
報 告 書



平成 27 年 3 月

国立大学法人奈良教育大学

地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

【日程】

<一日目(8月14日)>

時間	活動内容	場所	備考
8:00 ~9:00	<p>学生集合 参加者集合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出迎え・受付</li> <li>・名札づくり(来た子どもから順に)</li> </ul> <p>受付：泉谷・北村・福西(守衛室横)</p> <p>正門：教室待機以外の学生</p> <p>教室待機：①麻生 ②寺田 ③濱崎 ④木村 ⑤濱田 ⑥親木 ⑦藤間 ⑧佐野</p>	大講義室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室待機の学生が各班の子どもに名札をつくる指示をする。</li> <li>・班で集まって着席。</li> <li>・財布の中身を確認して回収</li> </ul> <p>&lt;物品&gt; 名札・名札入れ・ペン 班セット(カメラ、救急セット)</p>
9:00~ 10:00	<p>オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマソング</li> <li>・テーマ(コント形式)</li> <li>・あいさつ(加藤先生)</li> <li>・一日の流れの説明</li> <li>・アイブレ <ul style="list-style-type: none"> <li>・拍手</li> <li>・肩たたき</li> <li>・リズム4(班で自己紹介)</li> </ul> </li> <li>・テーマソング練習</li> <li>・キャンパス FW 説明(10分)</li> </ul> <p>【竹田・米澤】</p>	大講義室	<p>テーマ「みち～あなたと私とみちとの出会い～」</p> <p>テーマ紙： 歌詞カード：貼る。 ギター：桑、浅野</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・必要なものを持ってキャンパスフィールドワークへ (しおり・水筒・タオル・筆記用具・帽子・雨具・)</li> </ul>
10:00~ 12:00	<p>キャンパスフィールドワーク</p> <p>【堤・横井】</p>	キャンパス内	<p>各ポイントに学生が立つ。+巡回(クイズ出題など?+給水)</p> <p>運営学生でテント移動</p>
12:00~ 13:30	<p>昼食</p> <p>テント設営</p>	<p>大講義室</p> <p>附属中学校特支学級運動場(テント広場)</p>	<p>昼食は大講義室で食べる。</p> <p>ゴミ袋： ジャグ：</p> <p>食後、移動し、テント設営を行う。(テントはプレハブ付近で受け渡し)</p> <p>FW用の荷物(しおり・水筒・タオル・筆記用具・雨具)</p> <p>お風呂セット(着替え・タオル・シャンプーなど)を持って大講義室へ</p>

地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた  
 持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト  
 第3回奈良 ASP ネットワーク ESD 子どもキャンプ実施要項（案）

1. 目的

本年は DESD（ESD のための 10 年）の最終年度であり、日本各地でユネスコスクールを中心として ESD の活動が展開されるようになり、奈良においてもこれまでの経験を生かしつつ、その充実が日々目指されている。本キャンプでは、奈良のユネスコスクールの児童及び教員の ESD の体験、及び教員・学生・大学院生の企画立案段階からの協議による ESD 指導スキルの向上、さらにユネスコスクール間の児童生徒・教員の交流を目的に開催する。

2. 主催

奈良教育大学、奈良 ASP ネットワーク

3. 後援

奈良市教育委員会（申請予定）、奈良県教育委員会（申請予定）

4. 開催日時

平成 26 年 8 月 14 日（木）9 時～8 月 15 日（金）16 時

5. 会場

奈良教育大学キャンパス、及び附属小学校、ならまち、奈良公園

6. 対象・定員

奈良 ASP ネットワーク加盟校の児童・生徒（小学校 5 年生から高校生）及び、教員、大学生、大学院生

児童・生徒の定員：48 名（男女 24 名ずつ）

7. 募集期間

平成 26 年〇月〇日（ ）～〇月〇日（ ）

参加費

2,500 円（食料費、入浴料、保険料）

8. 内容

9 時	集合
9 時～10 時	オリエンテーション
10 時～12 時	キャンパス探検
12 時～13 時 30 分	昼食・テント設営
13 時 30 分～16 時 30 分	テーマフィールドワーク
16 時 30 分～19 時	夕食銭湯体験
19 時～21 時	キャンプファイヤー
21 時	就寝

6 時 30 分～7 時	起床
7 時～9 時	朝散歩・朝食
9 時～12 時	テーマ別映像作品の作成
12 時～13 時 30 分	昼食・テント撤収
13 時 30 分～15 時	活動の振り返り
15 時～16 時	さよならの集い
16 時	解散

【日程】

<一日目(8月14日)>

時間	活動内容	場所	備考
8:00 ~9:00	<p>学生集合 参加者集合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出迎え・受付</li> <li>・名札づくり(来た子どもから順に)</li> </ul> <p>受付：泉谷・北村・福西(守衛室横)</p> <p>正門：教室待機以外の学生</p> <p>教室待機：①麻生 ②寺田 ③濱崎 ④木村 ⑤濱田 ⑥親木 ⑦藤間 ⑧佐野</p>	大講義室	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室待機の学生が各班の子どもに名札をつくる指示をする。</li> <li>・班で集まって着席。</li> <li>・財布の中身を確認して回収</li> </ul> <p>&lt;物品&gt;</p> <p>名札・名札入れ・ペン</p> <p>班セット(カメラ、救急セット)</p>
9:00~ 10:00	<p>オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマソング</li> <li>・テーマ(コント形式)</li> <li>・あいさつ(加藤先生)</li> <li>・一日の流れの説明</li> <li>・アイブレ <ul style="list-style-type: none"> <li>・拍手</li> <li>・肩たたき</li> <li>・リズム4(班で自己紹介)</li> </ul> </li> <li>・テーマソング練習</li> <li>・キャンパス FW 説明(10分)</li> </ul> <p>【竹田・米澤】</p>	大講義室	<p>テーマ「みち～あなたと私とみちとの出会い～」</p> <p>テーマ紙：</p> <p>歌詞カード：貼る。</p> <p>ギター：桑、浅野</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・必要なものを持ってキャンパスフィールドワークへ</li> </ul> <p>(しおり・水筒・タオル・筆記用具・帽子・雨具・)</p>
10:00~ 12:00	<p>キャンパスフィールドワーク</p> <p>【堤・横井】</p>	キャンパス内	<p>各ポイントに学生が立つ。+巡回(クイズ出題など?+給水)</p> <p>運営学生でテント移動</p>
12:00~ 13:30	<p>昼食</p> <p>テント設営</p>	<p>大講義室</p> <p>附属中学校特支学級運動場(テント広場)</p>	<p>昼食は大講義室で食べる。</p> <p>ゴミ袋：</p> <p>ジャグ：</p> <p>食後、移動し、テント設営を行う。(テントはプレハブ付近で受け渡し)</p> <p>FW用の荷物(しおり・水筒・タオル・筆記用具・雨具)</p> <p>お風呂セット(着替え・タオル・シャンプーなど)を持って大講義室へ</p>

			(それ以外はテントに置いておく。)
13:30~ 16:30	テーマ別フィールドワーク 【北側・後藤田】  ※16:00 に椿井ホール集合	ならまち	出発前に女の子、お風呂に入れるか連絡→本部へ連絡  夕食の店を決める→本部へ連絡 スタンプ考える。
16:30~ 19:00	チャレンジタイム 【藤田・幸田】 店は8件予約済み(17:00~)  ※18:30 にテントに戻り、スタンプの練習	椿井ホール ならまち	給水 FW用の荷物を置き、お風呂セットを受け取る。 一人2000円を渡す。 財布は学生が管理する。 子どもの持ち物(しおり、チャレンジマップ、帽子、水筒、お風呂セット、雨具)  お風呂に入れない子は夕食後、大学へ向かう。班とは大学で合流。 ファイヤー班は準備を開始。  ゴミ袋(荷物回収用):
19:00~ 21:00	ひぐらしの集い  キャンプファイヤー 【島・仲】  トワリング、アंकロン、学生スタンプ(1回生)  振り返り	テント広場  附属小学校 運動場	各班で、ひぐらしの集いまでに全員がトイレを済ませておく指示をする。  ※雨天時：附属小体育館  振り返り後、班ごとに解散
21:00~ 21:30	就寝準備 就寝	テント広場	班ごとに ①歯磨き ②水筒洗う ③6:30 まではテントから出ないという指示をする。
21:30~	スタッフミーティング スタッフ就寝	プレハブ	一日目の振り返りと二日目の予定の確認を行う。

<二日目(8月15日)>

時間	活動内容	場所	備考
6:00~ 6:30	起床・準備 洗面、給水、健康チェック トイレ	テント広場	6:00 まではトイレ以外テントから出ないように指示する。
6:30~ 8:50	集合  朝散歩 【二階堂・濱崎】	テント広場  飛火野	朝食： ブルーシート： ゴミ袋： ※雨天時は附属小学校体育館で行う。  持ち物：タオル、水筒、帽子、 (筆記用具、しおり) ※筆記用具、しおりは班の学生が管理。
8:50~ 9:00	集合写真	パルテ前	
9:00~ 12:00	テーマ別フィールドワーク映像作品の作成 【黒木・春日】	情報館	DVD 班が二日間の全体のムービー作成  持ち物：しおり、筆記用具
12:00~ 13:30	昼食 テント撤収 ※時間は決めずに、班毎に。	大学生協	テントのチェックを特支グラウンドで受ける。 テントは北村先生の部屋へ。(文科棟) テントチェック：
13:30~ 15:00	活動の振り返り (ムービーの上映など) ESD 勉強会(20分) 【後藤田・北側】	310 教室	持ち物：筆記用具、しおり
15:00~ 16:00	さよならの集い ・映像で二日間を振り返る ・あいさつ(加藤先生) ・グループごとの振り返り 【竹田・米澤】	310 教室	司会：竹田 GT：桑・浅野
16:00	解散		解散後、全員で後片付け (掃除場所配当表参照)

## 掃除場所担当表

場所	リーダー						
	310 教室	幸田	黒木(浩)	濱田	辻野	二階堂	亀井
テント周辺	米澤	親木	渡邊	松浦	千場	北側	
附属中トイレ	竹田	春日	谷垣	木村	口脇	澤田	千場
附属小グラウンド	島	仲	黒川	柴田	麻生	黒田	
プレハブ体育館	坂野	杉田	濱崎	平田	澤田	浅野	
寧楽会館(看板等撤収)	糸	寺田	田中	藤田	加藤	板倉	
反省会準備	後藤田	藤間	村岡	吉門	森本	武田	横井



## ESD 子どもキャンプを通して学んだこと

国語教育専修1回生 亀井 花野

2014年8月14日～15日に奈良教育大学キャンパスとその周辺で、第3回 ESD 子どもキャンプが開催された。ESD（持続可能な開発のための教育）についてみんなで学びあう、未来について考える活動を通して地域のつながりを見出す、みんなで仲良く活動し友情を育てる、をねらいとし『『みち』～あなたと私とみちとの出会い～』をスローガンとしたこのキャンプには小中学生41人と奈良教育大学の学生が参加した。

私はこのキャンプを通して3つのことを学んだ。一つ目は、仲間と協力し合うことの大切さ。二つ目は、自分からコミュニケーションをとっていくことの重要さ。三つ目は、先を見通しながら行動することである。

一つ目の仲間と協力し合うことの大切さだが、私はキャンパス探検の担当をした経験から学んだ。キャンパス探検とは、大学内を子どもたちに探検してもらうことで大学内にある遺跡と植物について知ってもらおうという企画である。キャンプの数ヶ月前から同じキャンパス探検の担当の人たちと話し合いを重ね、ワークシートを作成したり、遺跡や植物の下調べをしたりと準備をしてきた。各メンバーが皆忙しくなかなか進まないことや、アイデアがなかなか出なくて困ったことなどがあったが、その度に企画リーダーに相談したり、皆で話し合いを重ねて各自で仕事を分担するなど全員で協力したりしたおかげで子どもたちに「思い出に残った」と言ってもらえる企画ができたと思う。



キャンパス探検の様子

二つ目の自分からコミュニケーションをとっていくことの重要さ。私は2日間子どもとの活動班で活動した経験からこのことを学んだ。キャンプ一日目の朝、初めての顔合わせで子どもたちから感じたのは緊張だった。そこで常に笑顔を浮かべて子どもたちの名前を呼びながら積極的に話しかけるように心がけた。すると子どもたちもだんだん言葉数が多くなり、笑顔も出てくるようになった。子どもたちが打ち解けてくれたのは、受け身ではなく積極的に自分からコミュニケーションをとろうとしたからではないかと思っている。

三つ目の先を見通しながら行動することである。2日間を通してこのキャンプでは、様々な企画が行われた。企画に合わせてタイムスケジュールは細かく決まっている。これに合わせて、子どもたちと活動していくことが難しかった。たとえば食事や入浴の時間には、あまりのんびりさせずにキャンプファイヤーに間に合うように時間配分し、なおかつトイレに行かせる時間を設けるなど、次に何があるかを考えながら行動しなければいけないことを学んだ。

今回初めて参加したキャンプだったため不安も大きかったが、周囲の先輩がたの支えもあって充実したものにすることができたと思っている。このキャンプを通して自分の知らなかった自分、周りの仲間の一面、まさにスローガンにもある「みち」との出会いがたくさんあったと感じた。この先もこういった活動に参加することで様々な経験やスキルを得たいと思う。

## ESD 子どもキャンプで学んだこと

幼年教育専修1回生 岸本 あずみ

2014年8月14日、15日に第3回 ESD 子どもキャンプが行われた。ESD 子どもキャンプとは、ユネスコスクールに加入している小中学生と、奈良教育大学とで行うキャンプである。子どもたちは、学年も学校もバラバラだが、学生のリーダーを中心として1泊2日間、班として活動を共にした。今年のスローガンは、「みち」～あなたと私とみちとの出会い～であった。これは、今の子どもたちに自分の故郷が昔はどのような町であったのか、そして、今後どのような町を自分たちの手で作っていききたいのかを一緒に考えていこうという目的のもとに設定された。

私が今回の ESD 子どもキャンプで学んだ力が3つある。一つ目は、コミュニケーション能力、二つ目に先を見据える力、三つ目は、子どもとの接し方である。

一つ目のコミュニケーション能力については、今回のキャンプの班では先輩が2人おられた。自分と近い年の先輩が子どもと話しているのを間近でみて勉強になった。なんでも自分から発するのではなく、子どもたちからの発信を待ってみたり、1つの話題をどんどん膨らませていったりといったようなことは大変であるが、自分の能力アップにもつながり、子どもももっと話したい、聞きたいといった意欲が生まれると思った。

二つ目の先を見据える力についてだが、次に何をするか、必要な荷物はなんなのかを把握していないと子どもたちに教えることができない。子どもたちを引っ張っていく立場の自分が把握していないことで、子どもたちに迷惑をかけてしまうことになるからである。その他にも、物事を進めていく段取りを考えたり、散策の時などは時間と道のりを考え、子どもたちを誘導したりするのも先を見据える力は必要不可欠な力であると感じた。



キャンプの最後の場面

3つ目の子どもとの接し方については、子どもと接することは楽しく、新しい発見が毎回ある。その反面、自分の反省点も見えてきた。今回だけではなく、さまざまなキャンプを通して思ったことは、褒める時は思いっきり褒めて、注意するところは注意するといった部分をはっきり分けることが大切だということだ。

以上の理由から、私はキャンプとは普段学べないようなことが学べる場だと思う。キャンプで子どもたちのリーダーという立場に関わることは、これから夢をかなえていくにあたって大切な経験となるとともに、キャンプに参加するという自分の努力や積極性が必要となってくると思う。



集合写真

## しんどいから充実

英語教育専修1回生 加藤 彩乃

8月の中旬、カンカン照りの太陽が顔を出したり、突然の雨が降ったり……そんな天気が続くなか、ユネスコクラブが主体になって ESD 子どもキャンプが開催された。様々な小学校、中学校から多くの生徒、児童が参加してくれた。2日間を通して、太陽が全力で輝く中私たちは歩き、動き、声を出し続けた。正直、このキャンプはとてもしんどいものであった。参加した子どもも例外なく、運営に回った学生も班に入っていた学生もみんな暑さで疲れていた。しかし、その中でも子どもの輝く笑顔や笑い声がある。そのような状況の中で、2日間を走りぬけた。疲れもピークに達していた最後のテーマソングの合唱。それでも私たちは最後まで、全力で歌った。私の印象に残っていることは、最後に私の班の子どもが歌の途中で泣いてしまったことだ。2日間をやりきった充実感と、しんどさをともに乗り越えた班のメンバーとの別れの悲しさとで、感極まって泣いてしまったようだ。私は、その子が泣いているのを見て、思わずもらい泣きしてしまった。私も途中であきらめたくなくなるくらいしんどかった。でも、頑張った甲斐というのはここにあるのだなと強く感じた。また、班の他の子どもも「来年も参加するの？」と言ってくれた。

私が今回のキャンプで学んだ「しんどさの後の充実感」。これは、今後の人生において様々な場面で役に立つ。第1に今後の大学生活で、第2に自分が教員として働くときだ。

第1の今後の大学生活においてだが、日々の学習や学校外での活動などこれからさらに多忙になり、もういっそのことやめたいと思うことも頻繁にあるだろう。そんな時に、頑張った先に充実感があると知っていることがどれほど自分を勇気づけるだろう。頑張れば頑張るほど自分が最後に得るものは大きいのだ。このことを学べた私は、来年の子どもキャンプでは子どもにこのことを知って帰ってもらう努力をしたい。今年初めてのキャンプで、学ぶことだらけであった。正直、子どもに何かを伝えようとする余裕はなかった。来年は、何か伝えたいという意思をもって臨みたい。私が伝えることは、「頑張った先に、充実感がある」ということである。

第2の自分が教員として働くときであるが、教員という職業は、自分の仕事の成果がはっきり目に見えることが少ない。どれだけ自分が頑張っても成果が出ないこともあるし、生徒の頑張り次第であるから、結果は人に委ねられる。今まで以上に充実感を得るまでに、しんどさを味わわないといけない。そんな時にも、最後に得られる充実感を知っていれば、もう少し、あとちょっとと頑張れる力になるだろう。

以上2点のように、私が今回のキャンプで学んだことは、今後の人生においてとても大切なことである。これから立ちふさがる壁に立ちむかう、大きな原動力になることは間違いない。自分が学んだよいことは共有すべきだ。是非、来年のキャンプでは参加した子どもにこのことを知って帰ってもらいたい。私は、そのために努力をしようと思った。



キャンプのスローガン発表

### 第3回 ESD 子どもキャンプを終えて

国語教育専修2回生 吉門 歩実

2014年8月14日、15日の2日間にわたって第3回 ESD 子どもキャンプが行われた。私にとっては2回目の ESD 子どもキャンプであると同時に、今回は7班の班長として迎えるということもあったため、昨年以上に責任感や緊張感があり学ぶことも多かった。今回のキャンプを通して私が学んだこと、考えたことは主に3つある。一つ目は役割分担について、二つ目は叱ることについて、そして三つ目は人と人とのつながりについてである。

まず第1に、役割分担についてである。当然、全員が2日間のスケジュールをしっかりと頭に入れておき、班やそれぞれの学生の動きなどを把握しておくことは必要である。また一人ひとりが、子どもが安全に楽しく活動できるように細かなことにまで気を配ることがとても重要なことだという考えは、キャンプ前から持っていた。しかし今回のキャンプで班活動を行う中で、新たに実感したことがある。それは、役割分担の大切さだ。誰かが1人で全てを完璧にこなすことは難しい。そのようなことをしようとすると、逆に焦ってしまい失敗する可能性がある。だから1人で無理な場合は、同じ班の学生や子どもに上手に仕事を分担させることが大切だと感じた。誰か1人に大きな負担がかかることなく全員で協力すること、一致団結できることが重要であり、信頼関係にもつながるのではないかと考える。実際に私が今回のキャンプ中、特に班活動の中で、そのように上手な役割分担をすることができたのかは分からないが、この考えをこれからの機会に役立てたいと思う。

第2に叱ることについてだが、私が昨年の ESD 子どもキャンプを終えて最も反省したことが「必要な時に子どもを叱ることができなかった」ということだった。そのため今回のキャンプ中は、必要な時は適切な言い方、態度で叱ることを目標の1つにしていた。実際に一度だけ子どもに厳しく注意したが、その後に雰囲気が悪くなったり話しかけづらくなったりはしなかったのよかった。ただ「叱る」と「怒る」との区別が難しく、きちんと意識して区別できるようにならなければいけないと感じた。

第3に人と人とのつながりについてである。2日間の活動のうち、ほとんどが班で行動するため、班員同士の信頼関係が大切だと感じていた。ただ、信頼関係とはどのようにしたら築けるものなのかということがよく分からなかった。しかし、初日に班員が集合したばかりの時は学生も子どもも緊張して固くなっていたものの、様々な活動を行っていくにつれて徐々に打ち解けていくことができた。そして、班員それぞれのよいところを自然と発見することができた。意識して探さなくても他人のよいところが自然に感じられるというのは、信頼感があるからではないかと思う。また今回のキャンプでは、班に入らずに運営係として動いてくれた人が多くいた。その人たちの力があつたから、安全で楽しい班活動を行うことができたのだと思う。以上のように、このキャンプを通して人と人とのつながりを感じ、考えることができた。

このように、ESD 子どもキャンプから新たなことを学ぶことができた。班長になったことで、個々に全力を尽くすことと全員で協力することの両方が大切だと実感することができ、叱ることについても再び考えることができた。また、人と人とのつながりを感じることもできて、とても充実した2日間になったと思う。今回学んだこと、感じたことをこれからの役立てていきたい。



班で一致団結

### 第3回 ESD 子どもキャンプを終えて

英語教育専修3回生 糸 綾香

2014年8月14、15日、奈良教育大学にて、奈良ASPネットワーク第3回ESD子どもキャンプを行った。本年はキャンプ全体のテーマを「みち～あなたとわたしとみちとの出会い～」と設定し、このテーマに沿って各キャンププログラムを計画した。キャンプ当日は現職の先生方もたくさん応援に来てくださり、キャンプに参加してくれた40名の子どもたちと楽しく熱い2日間を過ごすことができた。

今回、私はオリエンテーション班に所属し、主に活動班のリーダー長、テーマソングの作成を担当した。私がこのキャンプを行うにあたり、設定した目標が3つある。第1に運営担当として活動班の学生リーダーをサポートすること、第2にキャンプ中の全体の様子を把握し、先を読んだ行動を心掛けること、第3にギターを最後まで弾ききることである。



なつきょん登場！

第1の学生リーダーをサポートすることについてである。今回、各活動班を組織するにあたって、たくさんの壁にぶつかった。学生全員が班に入れない、キャンプ未経験者が大半を占める、教員採用試験や教育・介護実習の直前というタイミングの壁など、何度もくじけそうになることがあった。班活動を行う学生リーダー自身が不安を感じていることも多く、キャンプ2日間を乗り越えることができるのかという不安が私の頭からはなれることが無かった。そんな中でも私にできることを精一杯やろうと考え、一人ひとりに声をかけ、時には一対一で話を聞き、コミュニケーションを多くとることを心掛け、キャンプ中もそれを忘れないように行動した。良い結果をもたらすことができたかは分からないが、学生一人ひとりと意思の共有をすることができ、彼らと自分自身の不安を少しは解消できたように思う。このキャンプをきっかけにキャンプだけに限らず、共に活動する仲間たちとよく話し、想いを共有することが活動して行く上でとても重要であると知ることができた。

第2の集団全体の様子を把握し、先を読んだ行動を心掛けることである。去年のキャンプでも先を読んだ行動が目標に挙げられていたが、今回は私にとっては少し意味が違っていった。なぜなら去年とは立場が大きく異なっていたからである。去年は活動班に入り、プログラムに沿ってどのように班を動かしていくかを考えていたが、今年は自分の班だけではなく、活動班全8班と運営班の行動の先を読まなければならなかった。これは非常に難しく、十分に達成することができたとは言えない。プログラム時間の押し具合、お風呂に入れないうちの子どもの迎え、必要物品の動き、お茶の支給など私が把握しきれないことが多く、先輩方、先生方に助けていただくことも多かった。来年はもっと全体を引っ張っていけるように、考え行動できるようになりたい。

第3のギターについてである。今回はキャンプファイヤーでの演奏だけでなく、テーマソングを作成しキャンプ中にギターを弾く機会が今まで以上にたくさんあった。去年までは先輩方が担当されていた役割であり、テーマソングを自作するというのはとてもプレッシャーであった。しかし作詞作曲に協力



最後の班ごとでの振り返り

してもらい、前日に完成したのにも関わらず一生懸命覚えようと歌ってくれた仲間のおかげで、そのプレッシャーをはねのけて役割を果たすことができた。最後のさよならの集いで、歌を歌っている間に泣いてしまった男の子がいた。私だけの力ではないけれど、それがとても嬉しかった。ギターはあくまでも、雰囲気作りのための手段であるので、頼り過ぎたくはない。

しかし今回、そんな男の子の様子を見て、最後まで弾き続けることができ、本当に良かったと感ずることができた。

このように事前に設定していた目標は、その全てを満足いくまで達成できたというわけでは無かった。しかし、去年までとは全く違う学びを今年は何ることができた。去年までは活動班としての目、今年は何運営班としての目、そして来年ももっと新たな目を養いたいと考えている。このESD子どもキャンプは毎年、私に新たな学びを与えてくれる。そんなキャンプを来年はよりパワーアップして実現させていきたい。



みんなで、「ハイ！チーズ！」

## ESD 子どもキャンプ

国語教育専修 1 回生 黒川 注

ESD とは持続可能な開発のための教育である。今回はキャンプを通して子どもたちとともに ESD について学びあおうというものであった。ただ ESD と一言で言ってもたくさんの学び方がある。そこで、未来について考える活動をとおして地域のつながりを見出すということを狙いにやってきた。スローガンは「みち」～あなたと私とみちとの出会い～である。具体的な活動としては一日目はオリエンテーションから始まりキャンパスフィールドワーク、奈良町のフィールドワークをして、夜にキャンプファイヤーを行った。二日目は朝散歩をして活動の振り返り DVD 作りとその発表会をして、さよならの集いという流れであった。1 班は 5 人～6 人の小、中学生と 4 人の大学生スタッフの構成で 1 泊 2 日を過ごした。

私は今回のキャンプに参加し学んだことがたくさんあった。その中でも 3 つ思い出に残っていることをあげたいと思う。一つ目はオリエンテーション、二つ目は奈良町フィールドワーク、三つ目は朝散歩である。

一つ目は、オリエンテーションについてである。オリエンテーションでは初めて班の全員が顔を合わせた。子どもたちはもちろん、学生スタッフも緊張していて表情がすごく硬かった。しかし、肩たたき、フォーリズム、拍手などのゲームを通して次第に緊張もなくなった。キャンプを楽しく過ごせたのもオリエンテーションのあったおかげである。

二つ目は、奈良町フィールドワークについてである。奈良町フィールドワークでは昔の奈良の町を写真と今の奈良の町を実際に行き二つを見比べて未来の町がどうなっているかを想像するというプログラムであった。班全員で昔の奈良の町の写真の場所を探した。学生よりも子どもたちのほうが地域のことについて詳しいことに驚いた。奈良町の知らなかったこともたくさん知り未知との遭遇ができた。

三つ目は、朝散歩についてである。私は朝散歩の担当であった。ゲームや散歩コースなどを考えた。子どもたちの前でゲームをするので何回も練習した。しかし、本番は緊張してしまった。しかし、朝眠たい中、飛火野まで歩き、疲れている子もいたと思ったが子どもたちが楽しそうにゲームをする姿を見ることができてすごく幸せな気分であった。また来年も朝散歩の担当をやりたいと思った。

今回のキャンプは精神的にも体力的にもしんどいことが多かった。準備の期間も長く途中で嫌になったこともあった。しかし、キャンプが終わった後の達成感や子どもたちの笑顔は忘れられなかった。教師を目指すうえですごくいい経験になったと感じた。本当にキャンプに参加してよかったと思う。



朝散歩にて

## ESD 子どもキャンプに参加して

英語教育専修 1 回生 口脇 和

8月14・15日でESD子どもキャンプに参加した。奈良市内の小・中学生と一緒に、大学内やならまちでフィールドワークをしたり、キャンプファイヤーをしたり、テントを張って外で寝たり、私にとっては初めての経験だらけのキャンプとなった。

今回のキャンプで、特に印象深かったことについて振り返る。まず一つ目に、ならまちフィールドワークでのできごと、二つ目に、キャンプファイヤーでのこと、そして三つ目にDVD作成でのことを振り返る。

まず、ならまちフィールドワークでのことについて振り返る。フィールドワークの途中に猿沢池の近くで休憩していた時、ある老夫婦が私たちに話しかけてきた。旦那さんが、奥さんが昔日本へ来たアメリカ人外交官に日本語を教えていたという話を聞かせてくれた。この時まで私は子どもと関わるということしか意識していなかったが、地域の人とも関わっているということに気付いた。英語科の私にとってはすごくためになる話であって、子どもたちも興味深そうに話を聞いていた。

次にキャンプファイヤーでのことについて振り返る。今回私は班活動に入って1泊2日でみっちり子どもと関わることができた。私の班のある男の子は最初、私や班の他の大学生や子どもたちが話しかけても全く反応してくれなかった。どうしていいか全然わからなくて、2日間やっていけるかどうかとても不安だった。しかし一日一緒に過ごしてたくさんその子に話しかけて、するとちょっとずつ笑顔を見せてくれるようになった。そしてキャンプファイヤーで、私はほとんどの時間その子の横についてゲームに参加していた。その子がすごく楽しそうにゲームに参加していて、その姿を見ることができて嬉しかった。キャンプファイヤーが終わって班ごとでの振り返りの時、班のメンバーが皆それぞれ一言ずつ振り返りを言っていて、その子の番が来た時にその子は自分からは何も言わなかった。けれど「今日楽しかった？」と聞くと笑顔で私の顔を見てその子は「楽しかった」と答えてくれた。このことが2日間一番印象深かったことである。

最後に、DVD作成でのことについて振り返る。1日目に班の子どもたちとずっと一緒にいて、子どもたちはたくさん話してくれたが子ども同士で話している姿をあまり見なかった。そして2日目の朝散歩のゲームでは、少しだったが子どもたちだけで話すようになっていた。そしてDVD作成の時、それまであまり話していなかった子どもたちが協力してDVD作りに取り組んでいて、全員が意見を出し合っていて作っていた。私は正直パソコンができる中学生が一人で作るのだろうと思っていたが、自分たちから進んで協力して作っていて、写真を見ながらワイワイしていて本当に楽しそうだった。

今回のキャンプを通して、自分はいろんなことに対して間違った認識をしていたと気付くことができた。特に子どもに関しては、キャンプに参加する前はしたら子どもと仲良くなれるかで悩んですごく不安だったが、いざ参加すると子どもたちは一緒に過ごすにつれて自然と慣れてくれてたくさん話しかけてくれたりしてくれた。参加する前の私は何を不安に思っていたのだろうと今になって不思議に思う。そういう意味でこのキャンプは、自分を見つめなおすことができたキャンプであった。



キャンプファイヤーの様子

## ESD 子どもキャンプ

英語教育専修1回生 黒木 浩亮

私は、8月14日から8月15日の間の2日間、ESD 子どもキャンプに参加し地元の小学校と中学校の児童・生徒とともに、フィールドワークやキャンプファイアーなど、様々な活動を行った。2日間という非常に短い期間であるが、その期間の中で私が得たものはたくさんあった。今回のキャンプのテーマは「みち」～あなたと私とみちとの出会い～というテーマであったが、今回、私自身も様々な道を歩くことによって、様々な未知との遭遇をしたのである。

さて、私は、上述したように ESD 子どもキャンプの中で様々な経験、つまり、未知との遭遇をしたわけであるが、このキャンプの中で経験した遭遇が3つある。以下の文章で私はその3つのことについて述べていく。

一つ目は、子ども達との出会いである。私は、このキャンプの中で活動班に所属していたので5人の子ども達と二日間、行動をとともにすることができた。その中で、子どもと接することの楽しさ、また、教育の難しさを身をもって実感した。このような体験は私にとって初めての体験であった。したがって、私はこのキャンプの中で子どもを通して、未知の体験をした。

二つ目は、未知との建物との出会いである。私は、このキャンプのフィールドワークやキャンパスワークという体験を通して、自分が今までは知らなかった建物との出会いをした。伝統的な建物から放たれる独特の雰囲気を肌に感じ、今まで決して見たことがない物に触れていくという体験は私の価値観を大きく広げ、私は未知の世界へ飛び立つ事ができたのである。したがって、私は、この体験を通して未知の体験をすることができたのである。

三つ目は、今回のキャンプを子ども達に提供する立場にたって働いたということである。確かに、私は小学生の時に学校の行事でキャンプという活動に参加し、その中でキャンプファイアーなどの体験をしたことがある。あくまでそれは、生徒としての立場で参加していた。このキャンプでは、子どもたちを指導しキャンプを提供するという、いわば、教員と同じ立場でキャンプに参加した。正直に言えば、大変なことだらけであった。常に、子どもたちに気を配っていなければならない、精神的にも肉体的にも辛いものもあった。しかしながら、その中で子どもたちと過ごした時間というもの、自分にとって貴重な体験をすることができた。さらに、キャンプを終えた時の達成感や充実感は、この立場を経験しなければ味わうことはできないのではないかと私は思う。したがって、この立場でキャンプに参加したことによって、私は未知の体験をすることができたのである。

私はこれまでに、3つの未知の出会いについて述べてきたが、よく考えてみればこの2日間で体験した全ての事柄が未知との出会いだったのではないかと私は考える。そして同時に、自分の知らない世界に飛び込んでいく、つまり、未知の体験をするということの重要性を認識した。したがって、私はこれから様々な新しいことに挑戦していこうと思う。



集合写真

## ESD 子どもキャンプ 2014

数学教育専修3回生 幸田 早苗

2014年8月14、15日に第3回ESD子どもキャンプが開催された。

私は今年のキャンプで学んだことが3つある。一つ目は、全体の動き、運営というグループでの動き、個人の動きを常に意識するための広い視野を持つことの難しさ、二つ目は、キャンプを一から作っていく大変さ、三つ目は、仲間のありがたさである。

一つ目の全体の動き、運営というグループでの動き、個人の動きを常に意識するための広い視野を持つことの難しさについて。今回のキャンプの前日に学生一人ひとりがキャンプに対する抱負・目標を決め、小さな紙に書いた。私は今までどこかで、重要なことは他人任せにしてしまうところがあったり、何か作業をしていると、しなくてはいけないことを忘れてしまったりするなどの自分の無責任さや、自覚の薄さを感じており、直していかなくてはならないと感じていた。そこで今回のキャンプでは、自分のやらなくてはいけないことはしっかりと責任を持って果たそう、それと同時に自分自身キャンプを楽しみ、盛り上げていこうという思いから、自分の目標を「自分の役目を果たす、且つ楽しむ。」に決めた。キャンプが終わった今、全体を振り返ってみて、自分の目標の達成度は50%ぐらいであったと感じている。こう感じるのは、キャンプを楽しみ、盛り上げることは自分自身ではやり遂げることができたと感じているが、しっかりと自分の役目を果たすことはできなかったからだ。運営はキャンプ全体のプログラム通りに動くのではなく、次のプログラムの準備や前のプログラムの後片付けなど、全体のプログラムと大きく違う動きをする。また、運営班が固まって動く訳ではなく、やらなくてはならないことをそれぞれが自覚して動かなくてはならない。しかし、私は運営班がやらなくてははいけないことを意識するあまり、自分一人に任せられていることを忘れてしまったのだ。このことから、全体の動き、運営というグループでの動き、個人の動きを常に意識するための広い視野を持つことの難しさを学んだ。

2つ目のキャンプを一から作っていく大変さについて。私は今までに2回、このキャンプに参加してきた。2回とも夕食銭湯班を担当してきた。今年も、今までと同じ夕食銭湯班を担当するとともに、運営としても関わった。この運営という立場に関わって、気付いたことがたくさんあった。私はあまり協力できなかったが、4月ごろからキャンプに向けて動き出し、企画書やチラシ、しおりなどのほとんどを学生が主に作り、それぞれのプログラムも学生が主体となって作り上げている。今まで、自分の担当するプログラムだけに集中して取り組んできて、また下級生のため先輩に頼っていたところもたくさんあり、当日も班に入り、流れるプログラムに乗る感じで、あまり学生が主体で動いているという意識はなかったが、運営に関わって、そんなところから学生が作ってきたのか、これも学生がやっているのかと驚くことばかりで、今までキャンプを作ってきた先輩方と今回のキャンプを作った仲間を尊敬するとともに、キャンプを一から作る大変さを学んだ。来年は自分も積極的にキャンプを作っていこうと思う。

3つ目は、仲間のありがたさである。キャンプに向けて真剣に頑張る仲間の姿や、キャンプを作っていく上でみんなで話し合っている仲間の姿は、自分も頑張ろうと励ましてくれたり、しおりの印刷、発送など大変な単純作業も仲間とならなれば笑いながら楽しくできたり、仲間の存在の大きさや、ありがたさを改めて学んだ。



2日目に撮影した集合写真

これらの学んだことを、これからの学びや来年に向けてのキャンプに活かしたいと思う。

### 第3回 ESD 子どもキャンプを終えて

物質科学専修4回生 後藤田 洋介

ESD 子どもキャンプは、大学内の施設と奈良町や奈良公園をフィールドに、奈良市内のユネスコスクールから小中学生を集め、ESD を体験的に学ぶキャンプである。大学内で行うキャンプは今年で3回目となった。今回は「みち～あなたとわたしとみちとの出会い」というテーマでキャンプを開催した。

このキャンプを通して私が感じたことは大きく分けて3つある。それは第1に事前準備に関すること、第2に児童生徒に感じてもらいたかったことについて、第3に仲間との協働についてである。

第1の事前準備に関しては、今年は例年よりも半月以上早く準備を開始した。また、今までは行っていなかった、学生用のしおりの作成を行ったり、各プログラムのリーダーが週に1回集まって会議を行ったり、テーマ別フィールドワークの内容やキャンプ全体のテーマをコンペ形式で決めたりした。学生用のしおりを作るにあたっては、どのようなことが学生用しおりに必要なのか、どのように作成するのかなど、多くの試行錯誤を行った。その結果、当日は自分で考え、行動を起こす学生が多かった。また、各プログラムのリーダーが毎週集まることで、どのプログラムも完成度が高く、プログラム同士が切磋琢磨していた。さらに、テーマのコンペでは、学生全員でキャンプを創り上げたい気持ちから、メインの活動や、キャンプ全体のテーマなど、多くの部分を学生の声を聞きながら作成した。コンペの結果、フィールドワークでは、昔の写真と今のならまちを見比べ、自分たちが“未来のまち”をどのようにつくっていきたいのかを子どもたちに考えてもらうことができた。またテーマの「みち～あなたとわたしとみちとの出会い～」では、「道」と「未知」をかけて、様々な企画にこのテーマを生かすことができた。事前準備を多く行うことで、当日の動きや、企画の充実、全体での意識の共有などができたと感じた。



事前全体打ち合わせ

第2の児童生徒に感じてもらいたかったことに関して、私はキャンプの全体の運営に加え、フィールドワークの企画メンバーとしても活動を行った。今回のフィールドワークでは、昔の奈良町の写真をヒントに今のならまちを探検するフィールドワークを実施し、昔から続く町並みと思われがちな奈良町も、実は移り変わってきたことを子どもたちに感じてもらい、未来のまちは自分



ふり返し発表会の様子

たちが担っていかないといけないという考え方や、キャンプを通して文化や自然、人と人のつながりを守っていく社会を自分たちが作っていかないといけないという考えを得てもらえるように企画を行った。当日は、予想していなかったことがあったものの、予定になかった、子どもたちに未来のまちについて考えなおしてもらった活動の中で、技術がとことん進んでいる社会や、自分本位な社会を描く子どももいたが、それ以上に「自然が豊かな町」、「地元の人とあいさつをするまち」「昔のものを語り継げる町」など、環境や文化、人と人とのつながりを尊重するような意見もたくさん書いてもらうことができた。また、最も印象に残った意見では「自分たちが今の良さと昔の良さを未来に伝えていきたい」という意見もあり、子どもたち一人ひとりが、自分たちのまちを自分たちが作っていかねばならない、当事者意識を得ることができたと感じている。

第3の仲間については、今回、私は初めて大きなキャンプのリーダーとして活動を行った。今まで、学生同士の活動ではリーダーとして何度か活動したことがあったが、100人規模での活動は今回が初めてであった。その初めての活動の中で、常に仲間助けられたと感じている。当日の班活動を支えた学生リーダーや、プログラムを円滑に実行した企画班、炎天下の中、運営として活動してくれた学生、その中でも特に当日の司会進行をまかせた大学院生と、班活動から学生の動き、カウンセリングをまかせた学生には、事前準備の段階から数多く助けられた。第1に述べた事前準備の段階で、例年は行っていなかったことを数多く導入したため、多くの負担をかけてしまったことは今回のキャンプで私が一番反省していることである。しかし、無理な要求にも毎回対応をしてくれ、今回のキャンプが成功したのは、自分だけではなく、仲間がいたからこそ得られたものであると感じている。活動を通して、自分1人ではできないこと、抱えきれないことを数多く感じ、仲間との協働をしていくことが大切であると感じた。

以上のように、キャンプを通して私は多くの学びを得た。今後の課題として私が感じているのは、引き継ぎに関することである。これから、次年度のESD子どもキャンプに向けて、今回一緒に活動を行った仲間にノウハウを受け継いでいきたいと思う。最後に、このキャンプでご協力いただいた先生方、キャンプを支えてくれた学生のみんな、そして3人組で常に知恵を絞ってくれた学生・大学院生の2人に感謝したい。



協働した仲間たち



講堂前で集合写真！

## 視点の変化

音楽教育専修 1 回生 柴田 萌

キャンプらしいキャンプをした経験のなかった私は、ユネスコクラブの新入生歓迎キャンプが実質初めてのキャンプだった。キャンプファイヤー時のゲームは本当に衝撃的だった。大学生が集まって、平常ではつまらないと思ってしまうような簡単なゲームを本気でやるという状況は、単純に驚いたが面白かったという印象で終わった。上回生の方々の話の流れの作り方や周囲への目の向け方等には尊敬の念を抱きつつも、どこか自分には出来ないこと、関係ないことのように感じていた。新歓キャンプでは私の意識は完全に「お客さん」だったのである。

さて、ESD 子どもキャンプにおいて私は自らの視点の変化に気がついた。一度キャンプというものを経験して気持ちに余裕が出来たこと、それから当然ではあるが、私は「企画者」側となり主役が子どもに変わったことに変化の原因がある。

まず気持ちの余裕についてだが、新歓キャンプの時は初めてのことで何事も分からず、言われるがまま、されるがまま物事が進んでいき、いつの間にか終わってしまっていたというのが正直な感想である。しかし今回はその経験が生かされ、周りを見て自分の行動を自分で判断する余裕をもつことができた。受動的だった行動を能動的なものに変えることができたのは、消極的になりがちな自分にとって大きな進歩であった。

次に立場の変化であるが、ESD 子どもキャンプでは学生はスタッフとして子どもを迎える側の人間である。新歓キャンプでは「お客さん」気分であっただけで、上回生の方々の世話になっていた自分が、子ども達の安全を見守り楽しませなければならないということで、より広い視野を心がけてキャンプに参加した。実際にキャンプが始まってみるとどうしても自分自身のことで精一杯で視野が狭くなりがちであったが、その度に周りの人達の視野の広さや機転に驚かされ、とても学ぶことが多かった。狭まりがちな視野の中でも次に生かしたいと思う発見をたくさんできたことは、大きな成果であると思う。

このように、私はどちらかというと内向的になりがちな人間であるが、ESD 子どもキャンプを通して行動することへの積極性や、その場に必要とされる行動の見極め方などを学ぶことが出来た。これは「企画者」側であるという自覚によって得ることが出来たものであると思う。これからもユネスコクラブの活動を通して、能動的に行動し周りを広く見る目を養っていきたいと思った。



班で協力してテント設営

## キャンプは未知との出会い

社会科教育専修4回生 寺田翔一

今回、はじめて「ESD 子どもキャンプ」に参加した。そもそも私がユネスコクラブに入ったのは、中澤先生の「ESD 概論」を受講し、ESDに興味を持ったからである。ユネスコクラブに入れば、ESDを学ぶことができると考えていた。それにもかかわらず、キャンプに参加してこなかったのは、「参加したい。」と思えなかったからだ。ESDを学びたいのに、なぜキャンプなのだろうと腑に落ちていなかった。今、これまでを振り返って思うのは、ESDを学びたいと思いながらも、それは知的理解にとどまっていた、キャンプに参加するという行動をとれていなかったということだ。最終学年になって、「考えていてもだめだ、行動しない。」という思いが、教育実習や大学での学びの中で強まり、「第3回 ESD 子どもキャンプ」に参加した。前置きが長くなったが、このキャンプのテーマでもある「みち」のひとつでもある「未知」に注目したいと思う。私が1泊2日のキャンプで学んだことは、「キャンプは未知との出会い」だということだ。

私がキャンプで出会った「未知」は3つある。1つ目は、子どもの態度の変化について。2つ目は、仲間と協力することについて。3つ目は、自分自身について、新たな発見をしたことだ。

まず、子どもの態度の変化について述べる。私は2班に所属していたが、はじめ2班の子どもたちは、表情がかたく、会話もなかなかとれない状態で、キャンパスフィールドワークに移ってから、コミュニケーションがとれていなかった。そこで、フィールドワークで写真をとることを利用して、学生の側から、さまざまなポーズをとることを提案した。はじめは少し恥ずかしがっている様子だったが、慣れてくると笑顔も増え、会話も弾むようになってきた。すると、フィールドワーク中に説明を受けても、反応のなかった子どもたちだったが、吉備塚の前では、質問をするようになったり、「こわい。」などと反応を示すようになったりした。はじめは、積極的な態度をとれていなかった子どもたちも、こちらか働きかけ続けることでしだいに、積極的に学ぼうとするようになることを学んだ。

次に、私がキャンプで学んだことは、仲間と協力することについてである。先ほど、学生の側から、写真のポーズを提案していったと述べたが、はじめからそれができたわけではない。何とか子どもたちを打ち解けさせようと、個別に会話をはかっていた。しかし、なかなか思うように打ち解けさせることができない中で、写真のポーズを考えだしていった。私たち学生が一体となって、子どもたちに働きかけたことで、しだいに打ち解けていくことができたと考える。教師はチームプレーだとよく言うが、まさにそれを体験することができたと思う。

最後に、このキャンプを通して、私自身が気づいていなかった自分自身に出会うことができた。私は、自分の感情を表に出すのがあまり得意ではない。しかし、キャンプに参加し、子どもたちや仲間たちと過ごすことで、自然と自分自身を素直に出していくことができた。特に、キャンプファイヤーでは、体を思いっきり動かし、大声を出して、キャンプに参加しているメンバーとふれ合うことができた。これまでは、そのようなことは苦手なことを避けてきた。今回、その苦手を乗り越え、心底楽しめたことは、成功体験になったと思う。

キャンプをふりかえって、1番強く思うことは、「キャンプが楽しかった。」ということだ。その理由は、前段落でも述べたように、子どもや仲間たちと歌って、踊って、2日間をともに過ごせたからというのはいままでのない。キャンプが楽しかったというもう一つの理由は、それらを通して、子どもたちの変化を身近で感じ、また、仲間と協力することで子どもたちを打ち解けさせるという課題を解決できたことによって感じた、自分自身が成長したという感覚だと考える。私はキャンプを通して、まだ知らないことに出会い、成長することができたと感じている。



2班最初のポージング  
(キャンパスフィールドワークにて)

## ESD 子どもキャンプを振り返って-反省と意見・次回への展望-

文化遺産教育専修2回生 佐野 宏一郎

2014年8月14、15日に奈良ASPネットワーク主催の第3回ESD子どもキャンプが奈良教育大学で行われた。私は奈良教育大学ユネスコクラブの一員として、このキャンプに運営スタッフとして参加した。私の役割は主に、活動班の8班の一員として子どもたちと活動をともしに行うことと、DVD製作班の一員として二日目に行われた子どもたちの思い出ムービーを製作する時間の企画・運営を行うことの2点だった。私はこの活動を通して、以下の3点について考えさせられることとなった。

一つ目は、「企画・運営の難しさ」である。このことは、DVD製作班での活動を通して痛切に思い知った。私たちの企画班は班員同士の予定がなかなか合わず、キャンプ前の打ち合わせに充分時間をかけることができなかった。よって、キャンプ中の夜中にも打ち合わせをしなければならない事態であった。キャンプ中に総集編の動画の製作も行うという自分たちの厳しい状況もあるため、このような事態になったことに多少の考慮はできるかもしれないが、それであっても、当日の負担をより少なくする工夫・計画ができたと考えられる。そのためには、前日までの準備の段階でできることは進めるべきであった。野球でも、試合(本番)の時間よりも、練習(準備)の時間のほうが多いように、準備にかかる時間をより長く充実させなければならない。我々にはそれが不十分であった。今後は、このことを糧にしてよりスムーズで負担のない計画をたてることができるように考えていきたい。

2つ目は「自分の将来」についてである。私は、教員になりたいくてこの学校に入学したわけではなかった。だから、入学してからこれまで“子どもとかかわる”経験を自主的にしようとは思ってこなかった。しかし去年、中澤先生のESDの授業を受けてESDに興味を抱くようになり、今年度よりユネスコクラブに加入した。これにより、子どもとかかわる機会が格段に増え、ESDについても考え方が変わった。ESDを学ぶためには、座学で知識を身につけることがスタートだと思っていた。しかし、今回のキャンプを通してその間違いに気づいた。ESDにはより実践的、行動的な学習方法が求められると考える。実際にその場で触れて、匂いを嗅いで、音を聞いて……。そのような実際の体験が学びとなるのだ。それほど深い知識は必要ではない。より求められるのは、行動力とその運営力なのだと思います。そして、“子どもとかかわり”が私の将来についての考えも大きく揺さぶることになった。子どもとの密接な時間の共有が人とかわることの楽しさを教えてくれた。将来まだ、教師になりたいと明確には決めたわけではないのだが、どうやら私は人とかわる時間を共有する中で楽しさや、時には悲しさを触れ合っていくことが特に好きらしい。そのため、将来的により人とかわりあえるような職業につけたらいいのだと考える。

最後の3つ目は「キャンプの将来」についてである。私はこのキャンプに参加したのは今回が最初であるが、キャンプ自体は今回で3回目である。私が思うには、まだはじめて3回目であるから、もっと試行錯誤してもいいのではないかと考える。確かに、去年の反省を踏まえての改善のように細かい部分の再案はあったという話をきいたが、ここで言いたいことはそのような細かいことではなく、新たな企画の提案などもっと大きな挑戦をしていくといったことだ。ユネスコクラブのスタッフ全体をみても、企画の段階から試行錯



活動班の集合写真

誤はしているものの、その方向がマニュアル化するという点を目指しているように見えた。また、私の活動班には初めてキャンプに参加したという子どもと以前に参加経験があるという子どもとがいたが、その二人の活動への取り組みの度合いには差があったように感じた。年齢的にも差があり、そのことも考慮しなければならないかもしれないが、以前参加してくれた子どもの方が、積極性は低かったような気がした。私の理想としては、どの子どもも楽しくて仕方ないというようになってほしいというところではあるが、そのために何ができるだろうか。それは、常に新しいことを取り入れていく、挑戦するといった精神なのではないだろうか。確かに、変わらないものを提供し続けるのも大切なことだとは思ふ。しかし常に同じことの繰り返しならば、マンネリ化を止めることはできない。はじめて参加した子どもも以前に参加した子どもも「もう一度来たい!」と思えるような場所を提供するのが一番の理想なのではないだろうか。「とても楽しかったけど、一度行ったからもういいや。」と思われるキャンプにはしたくはない。だから、終了後にアンケートを書いてもらうなどして、参加者の主体である子どもが、キャンプ中に素直に何を思ってどこがよくなかったのか、ということをしつかりと受け止めたい。

以上3点が、私がキャンプを通して考えたことである。このキャンプは社会に出たら必ず必要になるであろう企画・運営の方法や難しさを学べたし、自分の将来を考えるうえで1つの指標となった。また、レポートを書いたことで、これからのキャンプがもっとよくなるにはどうすればよいか、本当に楽しいと思えることは何なのだろうか、ということを考えることにもつながった。もちろん、今のキャンプの現状を批判するわけでもないし、今回のキャンプは皆が限られた時間の中で最大限の努力と最高のパフォーマンスを兼ね合わせた結果のキャンプだったと思う。しかし、自分で自分の首を絞めるようだが、このキャンプをさらによりよいものにできると思う。そのために、議論と新しい意見を交わしながら、来年につなげていきたい。

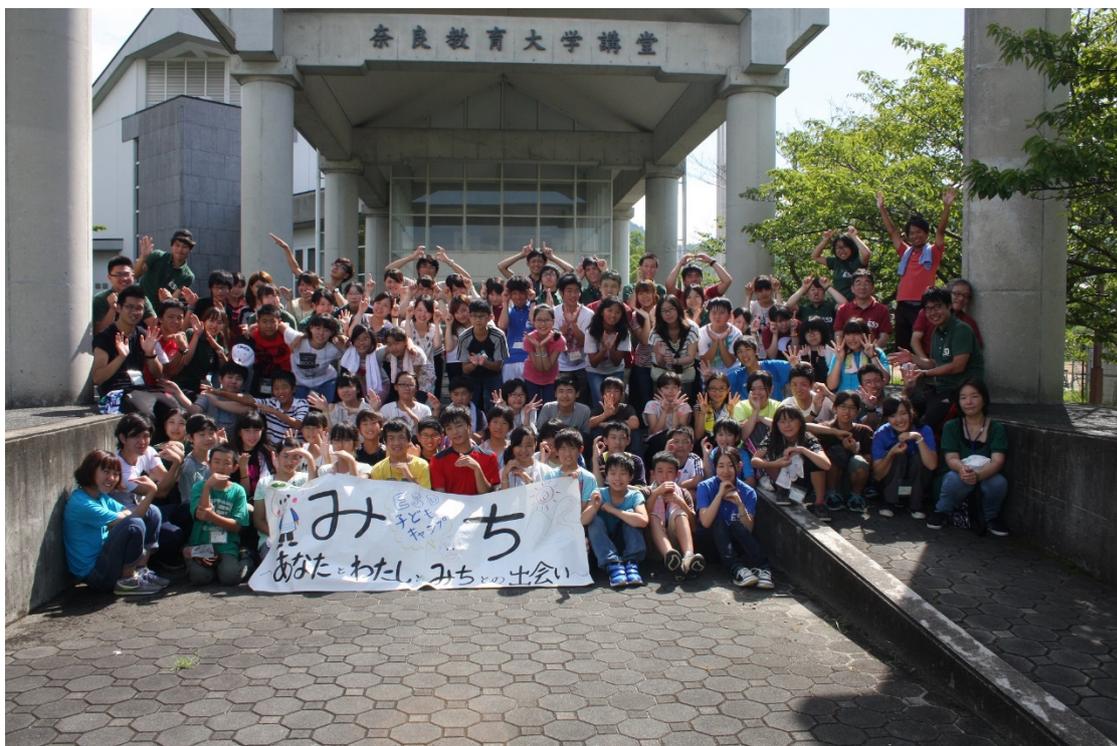


キャンプ参加者

子どもたちの成長につながっていることに気づいた。ならまちフィールドワークが充実したものになったからしっかり未来のならまちを自分の考えを持って描けていたし、ムービーの台詞もしっかり自分の意見を反映できていた。

最後に反省・振り返りの重要性である。活動して終わりでは、運営側の自分たちは成長できない。しっかり振り返って自分の改善点、班の改善点全体の改善点を考えることで成長できるし、これからの活動もよくなっていくのだなと思った。上にも書いたように私の班では反省会で子ども主体の話が上がったのだが、先輩にその話を聞かなければ気付けないまま、改善できないまま2日目を送っていたかもしれない。子どもたちにも、キャンプファイヤーやさよならの集いで振り返りの時間があったが、一日の自分をよく振り返っていた。ねらいをしっかりと意識して真面目に振り返ることができていた。

以上のことを学んで私はこのESD子どもキャンプで大きく成長できたと思う。今まではキャンプに参加する側で楽しいことばかりだったが、運営側に回ると、想像していた以上に上手くいかないことが多かった。その上手くいかなかったことをそのまま放置するのではなく、何がいけなかったのか、足りなかったのか考えることが大事だと知ることができたし、自分に欠けている部分も知ることができた。また、チャレンジすることもできた。上回生の皆さんや同回生の目標にすべき行動もしっかり見ることができた。このESD子どもキャンプで私はこれからは向けて目標ができた。周りへの思いやりの気持ち、気配りができるよう、もっと視野を広げて行動することと、しっかり目的を頭に叩き込んで行動することだ。このESD子どもキャンプで学んだことを忘れず、そしてこれからの生活にいかしていきたい。

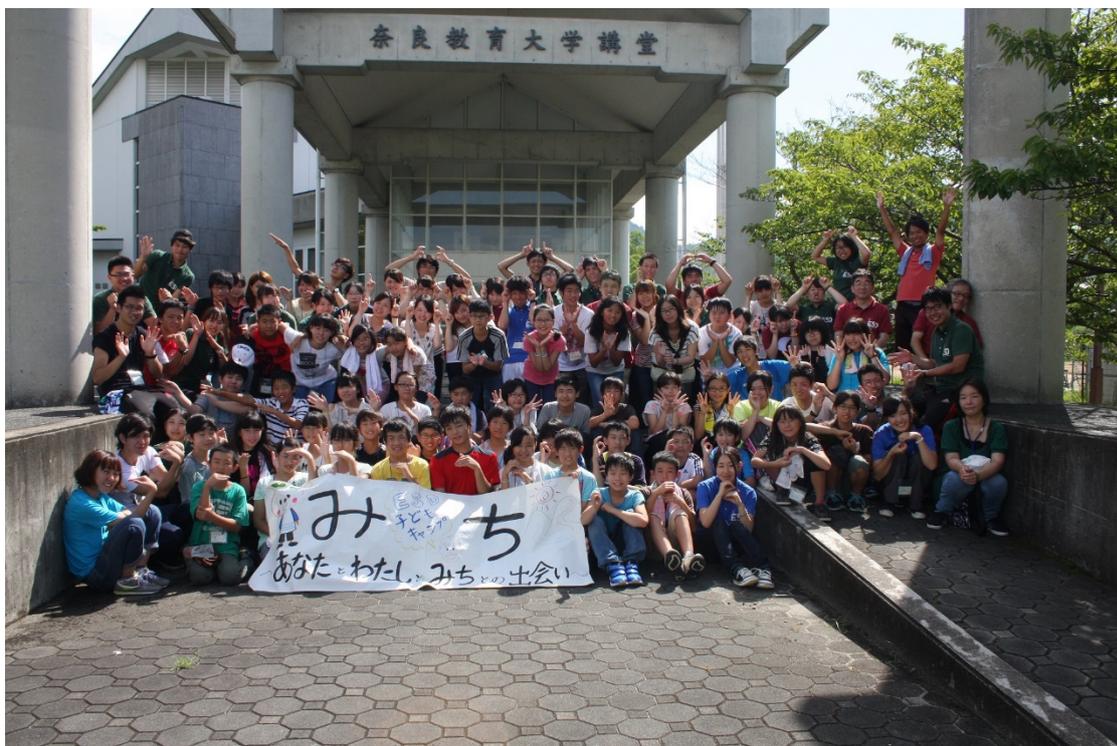


キャンプ集合写真

子どもたちの成長につながっていることに気づいた。ならまちフィールドワークが充実したものになったからしっかり未来のならまちを自分の考えを持って描けていたし、ムービーの台詞もしっかり自分の意見を反映できていた。

最後に反省・振り返りの重要性である。活動して終わりでは、運営側の自分たちは成長できない。しっかり振り返って自分の改善点、班の改善点全体の改善点を考えることで成長できるし、これからの活動もよくなっていくのだなと思った。上にも書いたように私の班では反省会で子ども主体の話が上がったのだが、先輩にその話を聞かなければ気付けないまま、改善できないまま2日目を送っていたかもしれない。子どもたちにも、キャンプファイヤーやさよならの集いで振り返りの時間があったが、一日の自分をよく振り返っていた。ねらいをしっかりと意識して真面目に振り返ることができていた。

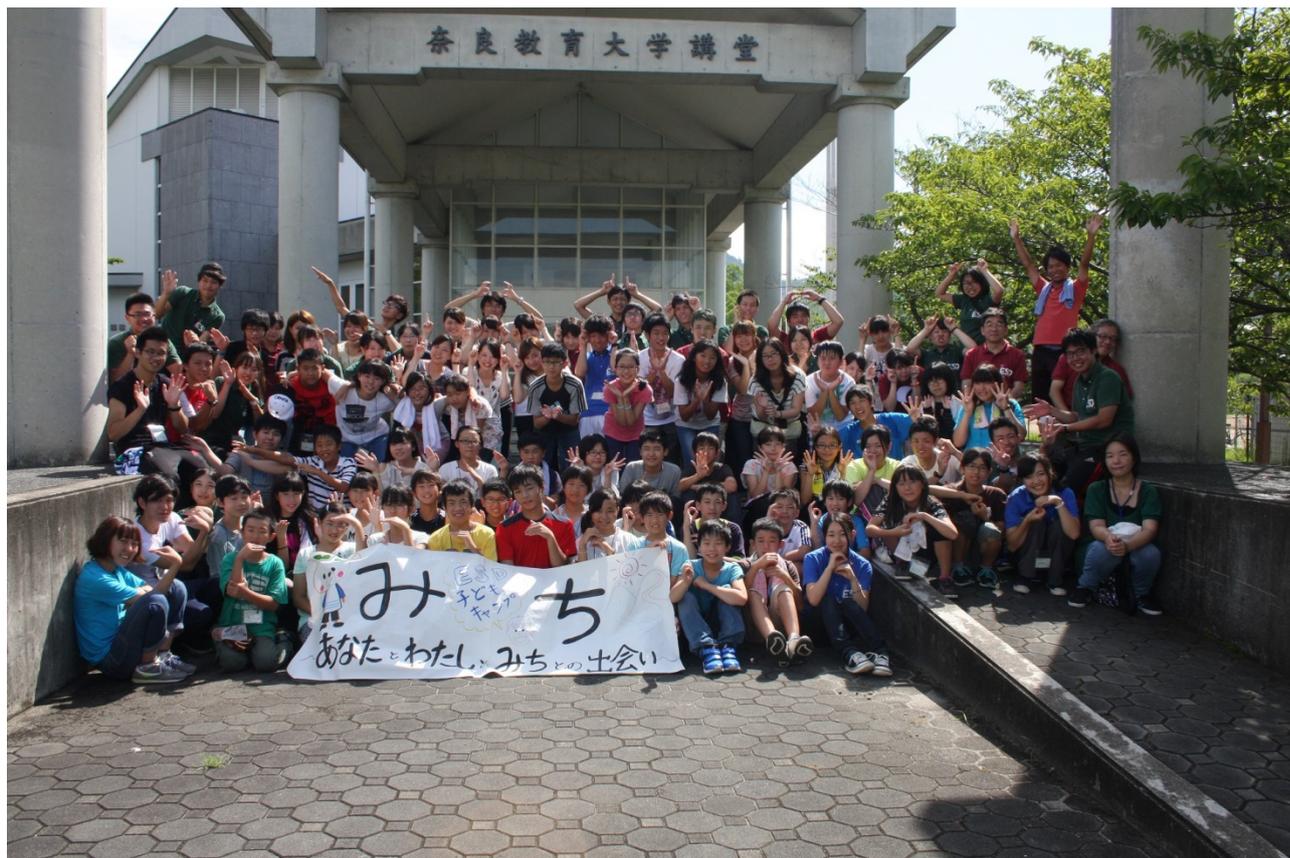
以上のことを学んで私はこのESD子どもキャンプで大きく成長できたと思う。今まではキャンプに参加する側で楽しいことばかりだったが、運営側に回ると、想像していた以上に上手くいかないことが多かった。その上手くいかなかったことをそのまま放置するのではなく、何がいけなかったのか、足りなかったのか考えることが大事だと知ることができたし、自分に欠けている部分も知ることができた。また、チャレンジすることもできた。上回生の皆さんや同回生の目標にすべき行動もしっかり見ることができた。このESD子どもキャンプで私はこれからは向けて目標ができた。周りへの思いやりの気持ち、気配りができるよう、もっと視野を広げて行動することと、しっかり目的を頭に叩き込んで行動することだ。このESD子どもキャンプで学んだことを忘れず、そしてこれからの生活にいかしていきたい。



キャンプ集合写真

## 最後に

以上の3つが今回のASP子どもキャンプと通して私が実感したことである。今年度は昨年の反省も踏まえてきちんと状況を把握できるように、「観察力」をテーマに活動してきたが、昨年とは違った視点から子ども達のいいところ、班のメンバーのいいところ、運営側のいいところなど多くのことを見ることができた。さよならの集いでも子ども達のいきいきとした表情を見ることができて、とても嬉しくなった。その反面、今年は自分から積極的に子ども達に関わっていくことが少なかったことが反省点としてあげられる。やはり、子どもとの関係づくりには、コミュニケーションが必要不可欠であると思う。そして、子ども達のことを知りたい、と思う気持ちをもっと必要だったと思う。今回の反省も踏まえて、子どもたちと自分から積極的にかかわっていきできるようにしていきたい。



キャンプ参加者の集合写真

## 最後に

以上の3つが今回のASP子どもキャンプと通して私が実感したことである。今年度は昨年の反省も踏まえてきちんと状況を把握できるように、「観察力」をテーマに活動してきたが、昨年とは違った視点から子ども達のいいところ、班のメンバーのいいところ、運営側のいいところなど多くのことを見ることができた。さよならの集いでも子ども達のいきいきとした表情を見ることができて、とても嬉しくなった。その反面、今年は自分から積極的に子ども達に関わっていくことが少なかったことが反省点としてあげられる。やはり、子どもとの関係づくりには、コミュニケーションが必要不可欠であると思う。そして、子ども達のことを知りたい、と思う気持ちをもっと必要だったと思う。今回の反省も踏まえて、子どもたちと自分から積極的にかかわっていきできるようにしていきたい。



キャンプ参加者の集合写真

## ESD 子どもキャンプの振り返り

数学教育専修1回生 杉田 岳史

私は2014年8月14日、15日に開催したESD子どもキャンプにスタッフとして参加した。このESD子どもキャンプは、毎年、奈良教育大学ユネスコクラブが中心になって開催しているもので、今年で3回目の開催になった。このキャンプは地域の子どもたちを奈良教育大学に招き、奈良の今昔を比べるフィールドワークや、テントを自分たちで張って泊まるなどの活動を行うキャンプである。

私はこのキャンプを通して子どもたちと関わっていく中で大切なことをいくつか学んだ。一つ目に子どもたちと関わる中で、今の私は先生でも友達でもないその中間の存在であること、次に子どもたちと関わる中で、子どもに否定させることが大切だということ、三つ目に子どもを名前で呼ぶことの大切さである。

一つ目の子どもたちと関わる中で、今の私は先生でも友達でもないその中間の存在であることについては、今の大学生である私は、子どもにとっては友達という存在には遠く、先生という存在には近すぎる存在であるということがわかった。そして、その関係は一步間違えてしまうと、ただのお兄さんという存在になってしまう。友達のように接していく中でも、時には厳しく、ただのお兄さんという存在にならないように注意することが必要ということがわかった。

二つ目の子どもたちと関わる中で、子どもに否定させることが大切だということについては、まず、子どもたちに自分から、自分の意見を出してもらうために、子どもたちに私の言うことを否定させることが助けになるということがわかった。自分の意見を言うということはほかの誰かの意見を否定することにもつながるので、最初に否定しやすいことを子どもたちにいうことで、子どもたちがその意見を否定し、子どもたちが意見を言いやすい場を作ることが大切だということがわかった。

三つ目に、子どもたちを名前で呼ぶことはとても大切なことということがわかった。子どもたちのことを名前で呼ぶことを心がけていくと、子どもたちも私のことを名前で呼んでくれるようになります。名前を呼ぶことで、その名前を覚えることもでき、名前を通していろいろな思い出を記憶しておくことができる。また、より密度の濃い関係を子どもたちと造っていけることがわかった。

以上のことを大切にしていくことによって、より子どもたちとの関係を作り出していけるということがわかり、子どもたちの意見を引き出す方法も分かったので、これからもこれらのことを生かしていきたいと思う。



キャンパスフィールドワークオリエンテーション

## ESD 子どもキャンプを通じて感じたこと

英語教育専修1回生 森本 珠美怜

私はキャンプ自体初めてで、塾でアルバイトしている人たちのように、普段から小中学生と関わる機会はほとんどなかった。そんな私がこの ESD 子どもキャンプのフィールドワークの企画準備から参加し、班のリーダーとしてたくさんの子もたちと関わった。

さて、私がこの ESD 子どもキャンプで考えさせられたことは3つある。第1に小中学生の現状、第2に班のリーダーとしてできること、第3に ESD を子どもたちに伝える難しさである。

一つ目の小中学生の現状としては、班の中に集団行動が苦手な子がいた。フィールドワークでも小学生の女の子のゆっくりのスピードに我慢できず、すぐに班から外れて1人で先に行動していた。「先に行かないで」と何度も注意すると逆に聞かなくなってしまう、だからと言ってそのまま班を2つに分けて行動するわけにもいかず、声のかけ方にとっても戸惑った。「もう少しゆっくり歩こう」と声をかけたり、興味をひく話題の話をしたりしてなんとか引き止めた。普段から小中学生と関わりのない私にとって、接し方をすごく考えさせられた。

二つ目に班のリーダーとしてできることについても考えた。主役はもちろん子どもたちで、リーダーとして答えやゴールを示さずに導くのは難しかった。フィールドワーク前に未来の町を描いてみようと言われてもなかなか鉛筆を動かさない子がいた。「正解とか間違いとかはないんだよ」と声をかけても躊躇して書けずにいた。「もう書かなくてもいい？」と何度も聞かれたが、粘りに粘ってヒントを出しつつ、なんとか文字で書いてもらうことができた。例を挙げると真似してしまうような気がし、ヒントの出し方もすごく難しく感じた。

三つ目に子どもたちに ESD について知ってもらうことの難しさを学んだ。二つ目とも関係するが、フィールドワークに出たとき「この写真と同じ建物じゃない？」と声をかけても、間違い探しゲームのヒントとしか受け取ってもらえていないように感じがした。しかし、最後の DVD まとめのときに、フィールドワークでも積極的に地元の人に声をかけていた男の子が、自分からフィールドワークの発表がしたいと言い、原稿もリーダーが手伝いながらも自分で考えた。その男の子はフィールドワークの目的であった昔と今を比べて未来を考える、といったことが自然とできていた。しかし、全体を通して子どもたちに ESD について考えてもらえたか、理解してもらえたかと考えると、なかなかそうは思えなかった。最後の ESD ミニ勉強会だけでなく、キャンパスフィールドワークやキャンプファイアーなどを通して ESD についてこだわって伝えていくべきだったように思った。今回子どもたちと活動する中で私自身が ESD について伝えられなかったこと、楽しかったキャンプで終わらせてしまったことが一番の反省点である。

今回このキャンプを通して個性的な子どもたちと活動するにあたって、大きく3つのことを学んだ。初めての子もたちとの班活動は戸惑うことも多かったが、とても勉強になった。今回の反省はまた来年につなげ、自分としてもどうやって ESD をわかりやすく子どもたちに伝えるか考えていきたいと思う。



ESD ミニ勉強会の様子

## ESD 子どもキャンプを通して学んだこと

数学教育専修4回生 親木 翔平

2014年8月14日（木）、15日（金）に奈良教育大学構内およびその周辺にて奈良市の小中学生が参加するESD子どもキャンプを行った。このキャンプの最大の特徴として、楽しいだけでなく、学びがあるキャンプであることが挙げられる。大学キャンパス内を探検したり、奈良町でのフィールドワークを行ったりと、自然・地域の魅力を感じることでできるものであった。そしてこの活動は、自分自身にとって楽しく、そして学びの多いものであった。

私がこのキャンプを通して学んだことは大きく分けて、次の2つである。それは、意図をもって行動することの必要性と学ぶ姿勢の大切さである。

まず、一つ目の意図をもって行動することの必要性について。例えば、班活動の奈良町フィールドワークを例にとっても、学生側の意図があるかどうかで子どもの活動・学びの多さは大きく異なる。意図を明確にしながらい行動していると自然と適切な声かけが生まれるが、そうでないと、ただ単に「楽しかった」で終わってしまう恐れがある。このようにならないように、そしてさせないように、明確な意図をもって行動することが大切である。

次に二つ目の学ぶ姿勢の大切さについて。学ぶ姿勢（活動する姿勢）が異なると、同じ活動をしていても身につけられることが大きく異なるのだと気づいた。私は今まで子どもと共にキャンプに「参加」することは何度か経験してきた。しかし、それを作っていくことはしたことがなかった。作っていくことによって責任感が生まれ、主体的に関わっていこうとするようになった。その結果、自分で考えながら行動することができたように思う。そして、これは学生側にだけいえることではなく、子どもの側にもいえることである。そういった姿勢で取り組ませるようにするだけで、より多くのことに気づき、学ぶことができるようになると思う。

このように、私はこの活動を通して前述の2つのことを学んだ。キャンプを通して学んだことであるが、これはキャンプに限定されるものではなく、日々の学習・研究・課外活動などすべてに関係することである。この学びを積極的に将来に活かしていきたい。



キャンパス探検中の写真



キャンプ集合写真

### 第3回 ESD 子どもキャンプ

英語教育専修1回生 村岡 良亮

8月14日～15日の2日間で第3回 ESD 子どもキャンプが開催され、小学校5年生から中学校3年生までの幅広い学年、様々な学校の子どもが参加した。このキャンプのテーマは「みち～あなたとわたしとみちとの出会い～」であった。新しく出会う人、まだ知らない自分、これから学ぶ未知に出会うということである。

私は班の活動に参加し、子どもとこの2日間行動をともにした。私の視点から次の3つの事柄に関してこのキャンプを振り返りたいと思う。第1にこのキャンプを初対面の人と行うことについて、第2に子どもが協力・成長できたことについて、第3に子どもがどれだけ学習できたかについてである。

第1のこのキャンプを知らない人と行うということは、子どもに大切な出会いを自主的にさせることができるのではないかと考えた。大学生の力を借りつつも、これから出会う人と協力しよう、楽しもうという気持ちを育むことにつながると考えた。そういった姿勢は子どものみならず、これからずっと必要なことである。

第2の子どもの協力や成長については、私の班ではその姿勢がよく見られた。1日目のフィールドワークから子どもだけで地域の方々に話を聞きに行くなどして、協力しようという姿勢が生まれ始めた。その姿勢が顕著に表れたのがテント撤収の時である。設営時とは違い子どものなかから、時間内に終わらせよう、やることはやろうという声が大学生よりも先に聞こえた。出会ってから2日目、大きな進歩であった。



今と昔の奈良町を比べ、ESD  
を考える

第3の子どもの成長と学習についてである。このキャンプを通して子どもたちに ESD について知ってもらい、考えてもらうことが目的の1つであった。昔の奈良町の写真と現在の奈良町の姿を比較したときに、銀行の建物や橋がそのままの形で残っていたこと、木などの自然が増えていたことに子ども自身で気づくことができた。さらには、将来に今あるものを残していき、かつ自然を増やしていきたいという ESD の考えを持ってくれた子どもがいた。この考えをぜひとも持ち続けてほしい。

以上のような成果が得られた今回のキャンプ。大学生が主体となってい、子どもにとっては初めて出会う人たちと行うことに意義があるのではないかと考える。キャンプで出会った人たちと楽しみ、協力して過ごした2日間は子どもにとって楽しむだけでなく、ESD について学習する良い機会となったはずである。このような ESD について楽しく考えることができる機会を提供し、そのような機会を増やすことが大事であると考えている。

## ESD 子どもキャンプでの学び

英語教育専修 M1 泉谷 忠至

2014年8月14日と15日に「ESD 子どもキャンプ」が開催され、奈良市内に住む多くの子どもが参加した。両日、学生スタッフと協力してくださった先生方のおかげで、無事、終えることができた。今年初めての参加であったが、このキャンプでの目標を「子どもが何か学ぶことができるように」とした。このレポートでは、その目標と2日間のキャンプを振り返り、子どもに対しての自分の中での反省と学びについて書く。

まず、子どもへの接し方である。私の班では男女合わせて5人の子どもが参加し、4人の学生スタッフが関わった。最初は自分も含め学生スタッフが、子どもが活動しやすいように環境づくりに努めたが、子どもと私たちの距離感を配慮すべきであった。仲良くなることはできたが、フィールドワークで説明を聞く際やDVD作成で班の協力が必要な際に勝手な行動を許してしまった。時には子どもがこちらの指示通りに行動するように言葉を強めてしまうことがあった。そのような状況を引き起こすことのないように、子どもとの接し方にメリハリをもっとつけるべきであった。キャンプで最初にきちんとする必要のあった、フィールドワークでの最初の説明の際に、話を聞く雰囲気づくりを徹底することで、子どもとのメリハリを作ることができたであろう。子ども一人ひとりに班としての責任感を持たせ、きちんとした集団行動を行うことができる班にするべきであった。

次に、子どもが学べるための環境づくりである。単なるキャンプでは楽しむことで終わってしまうかもしれないが、「ESD 子どもキャンプ」として子どもがESDを学ぶことができるように学生スタッフが誘導すべきであった。大学内と奈良町でのフィールドワークにおいて自然と歴史を学ぶにあたって、単に活動や遊びを行うことで終えてしまい、一場面一場面での子どもの学習をしっかりと確保することができていなかったであろう。ESDとして未来に歴史と自然を残していくべきことを考えさせるために、子どもに内容について考えさせることができるような発問や、それぞれの場所を探した後に班で学んだことを確認しあう時間が必要であっただろう。そうすればESDについての理解を子どもと共有することができただろう。

以上より、今回のキャンプに参加することで、子どもに対しての接し方について学ぶことができた。子どもと関わる際に仲の良いお兄さんで終わるのではなく、教師としてメリハリをしっかりとつけることができ、彼らがしっかりと学びをすることができるようになる必要がある。

「ESD 子どもキャンプ」として子どもにESDの大切さを伝えていくために、これからも子どもについての理解はもちろんのこと、ESDを伝えていくための教育についても理解を深めていくことがこれからの課題になるであろう。



活動班の写真

## ESD 子どもキャンプに参加して

教職大学院 M2 竹田 隼也

8月14日、15日と奈良ASPネットワーク第3回ESD子どもキャンプが開催された。「みち～あなたとわたしとみちとの出会い～」というテーマのもと、40名の子どもたちが参加してくれたキャンプとなった。

このキャンプに参加する上で、私自身は3つの目標を持って臨んだ。第一に運営の立場に立つこと、第二に司会をすること、第三に裏方の仕事をすることである。

第一の運営の立場では、全体を見ることを意識した。全体を見て動かなければ他の学生が動くことができないと考えたからである。しかし、実際は全体を見ることはできていなかった。私を含めた学生3人で運営の中心になって話し合い、企画を進めたが、企画することが初めてであったためどのように進めればよいかわからず、全体への連絡が遅れてしまったり、情報を共有できていない部分があったりした。その結果、学生が何をしたいかわからない期間ができてしまったり、運営の学生に迷惑をかけてしまったりした。企画を進めるにあたっては、中心に立つ人が見通しをもって企画を進め、次に何をしなければならぬかを常に考えて全体へ連絡をしていかなければならぬことがわかった。

第二の司会の立場では、誰よりも元気であることを考えた。前に立つ人が元気になるなければ他の人も元気になることを考えたからである。当日はオリエンテーションをはじめ、様々な場面で、前で話した。そのような時に、誰よりも声を出すこと、誰よりも表情豊かにすることを心がけた。初めはどのように振舞えばよいかわからず混乱したが、学生や子どもたちが笑顔になったり声を出してくれたりしたおかげで少しずつではあるが、自信を持って話すことができた。前で話しているのは一人であっても、学生や子どもたちと全員で一つのキャンプをつくっていることに気付くことができた。

第三の裏方の立場では、子どもたちが何をしたいかわからない時間がないようになることを考えた。ただ話をするだけの時間ができてしまうと時間ももったいないと考えたからである。今回のキャンプでは、裏方に回る学生が10名ほどいた。この学生が子どもと関わる機会が少ない分、次のプログラムやさらにその次を見越して行動することができた。その結果、子どもが全員そろったら次のプログラムに移るといった流れをスムーズにすることができたように感じている。また、各プログラムで学生が班から



キャンプスタート！

学生の様子も含めて見て、声かけをすることで、少しずつ視野を広げることができているのではないかと感じている。この経験を生かし、さらに視野を広げ、さらにコミュニケーションをとっていけるようになりたい。

抜けるということが少なかったため、子どもの安全面など、危機管理の面でも有効であったと考える。今回のキャンプで裏方を体験し、運営をする人が先を見通して行動することで子どもの学びや経験が充実することがわかった。

今回のキャンプでは、これまでのように班に入るのとはまた違う視点でキャンプを見ることができた。これまではほとんどの企画で一つの班だけを見ていればよかった。しかし、運営になることで全体を見なければならぬ。子どもだけでなく、

## ESD 子どもキャンプで学んだこと

教育学専修1回生 棚橋 菜央

ESDとはEducation for Sustainable Developmentの略で、「持続可能な開発のための教育」と訳される。現在の社会は環境問題や社会的問題、経済的問題など様々な課題に直面している。これら現代社会にある課題を自らの問題としてとらえ、解決し、社会的公正の実現や自然との共生を重視した社会の創造が求められている。ESDの実施に大切なことは、人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性をはぐくむこと、また他人、社会、自然環境との関係性を認識し「関わり」「繋がり」を尊重できる個人をはぐくむことである。私は、このキャンプで初めて出会う子どもたちと深く関わり、繋がりを作ることと、自分を見つめなおすことを目標としてこのキャンプに臨んだ。

私がESD子どもキャンプを通して学んだことは、2つある。一つ目に子どもと深く関わっていくためには積極性が必要であること、二つ目に一つの行事を成功させるためには裏方の力が必要であることである。

一つ目の子どもと深く関わっていくためには積極性が必要であるということについてである。私は今回のキャンプで、班活動に入っておらず、運営班として活動した。そのため、子どもと関わる機会がとても少なかった。子どもともっと関わりたいという気持ちはあったが、初めのうちは、自分は運営班だからと遠慮していた。途中で先輩方に「自分から関わりに行ったらいいよ」と声をかけていただき、いろいろ考え過ぎてしまって上手くできなかった。夕食と銭湯からは、活動班に混ぜてもらい、その時から、自分から子どもと関わっていくことができた。その時に、当たり前のことではあるが、自分から心を開かなければ子どもも心を開いてくれないということを改めて実感した。また機会があれば、どんな立場であっても自分から心を開き、積極的に関わっていきたい。

二つ目の行事を成功させるためには裏方の力が必要であるということについてである。私は今まで行事ごとなどで裏方の仕事をしたことがなかった。今回は運営班として、子どもたちが活動している間に次の活動の準備をしたり、掃除をしたりして、初めて裏方の大変さを感じた。裏方の仕事は子どもたちからは見えないものであるけれど、見えないところで頑張っている人たちのおかげで円滑に活動が進められているのだと感じた。同じ運営班の先輩も「役に立っていると自分に言い聞かせて頑張った」とおっしゃっていた。これから、何か行事ごとがある時には、裏方として見えないところで頑張っている人たちに対する感謝の気持ちを忘れないでいようと思う。

以上より、私はESD子どもキャンプで、子どもと深く関わるためには積極性が必要であること、行事を成功させるためには裏方の力が必要であることを学ぶことができた。



キャンプのまとめの場面

## ESD 子どもキャンプを終えて

社会科教育専修 2 回生 仲 孝昌

平成 26 年 8 月 14 日、15 日の 2 日間を通して第 3 回 ESD 子どもキャンプが行われた。このキャンプは奈良教育大学や奈良町のフィールドワーク、キャンプファイヤーなどを通して、3 つのねらいのもとに活動を行った。一つ目は ESD(持続可能な開発のための教育)についてみんなで学びあう。二つ目は未来について考える活動を通して地域のつながりを見出す。三つ目はみんなで仲良く活動し、友情を育てる。以上 3 つである。そして二日目に DVD を作成し、振り返りを行うことで 2 日間の学びの成果が確認できた。

そして今回の活動の中で一番学んだことは全体を見て動くことの大切さである。その理由として第一に班活動、第二にキャンプファイヤー、第三に学生の取り組みの 3 つが挙げられる。



キャンプ最終打ち合わせの様子

第一の班活動についてであるが、各班に入る大学

生は子どもの顔色や様子を見たり、子どもの学びのサポートをしたりすることが求められる。今回私はその中で 1 班の班長に選ばれた。そこで子どものことだけでなく、大学生も含め班全体を見ることが求められた。子どもへの配慮も当然ながら、1 班は経験の少ない 1 回生が 3 人であったので、不安や疑問を未然に防いで 1 回生も楽しみながら活動しやすいようにすることを心掛けた。

第二にキャンプファイヤーについてである。キャンプファイヤーは火を囲んで参加者の仲を深めたり、1 日過ごした班での結束を確かめたり、思い出づくりになる。しかし一部だけで盛り上がり過ぎてしまっても決して良いファイヤーだとは言えない。そこでやはり全体が盛り上がるようにしていく必要があった。私はキャンプファイヤーの企画を担当していたのでキャンプファイヤーの流れをどのように作っていくべきか企画チームで話し合いプログラムを立てた。本番ではゲームや歌、スタンプなどそれぞれで輪の中に入り切れていなさそうな子ども達の間に入り、全体が盛り上がるように声掛けをした。

第三の学生の取り組みについてであるが、やはりキャンプを企画運営するには学生の力が不可欠だ。今年は 1 回生が 30 名近くおり、そのうちの多くが今回のキャンプに携わった。今回のキャンプにも当然ながら 1 回生の力が必要であったが、班活動や企画運営を初めてすることはやはり心身の負担が大きかったはずだ。私は本番に至るまでの期間にできるだけあいさつや会話をして 1 回生とコミュニケーションをはかり、1 回生がキャンプに向けてモチベーションが保てるようにした。なかには悩みを抱えているものも数名いたが、最後までキャンプをやり遂げ、大いに力を発揮してくれた。

以上より、今回のキャンプを通して私は全体を見て動くことの大切さを感じることができた。全体を見て動くことは企画運営をするときや人の上に立つときに必要な能力であり、教師としても必要な能力であるといえる。今後もこの全体を見て動くということを意識しながら様々な経験や活動に取り組み、学びを深めていきたい。

### 第3回ESD子どもキャンプを終えて

英語教育専修 1 回生 谷垣 徹

8月14日と15日の1泊2日の日程で「2014年 奈良 ASP ネットワーク 第3回 ESD 子どもキャンプ」が行われた。今年度は「みち～あなたと私とみちとの出会い～」をスローガンとし、奈良市内のユネスコスクールの小学校・中学校に通う児童生徒40名、ユネスコクラブ学生50名、教員16名の参加をもって行われた。このキャンプは、ESD、すなわち持続可能な社会の担い手を育てるための教育を体験するための活動として、今年度で3回目を迎えた。事前の企画・準備から当日の運営に至るまで、たくさんの学生による協力と子どもたちのおかげで、充実した2日間を過ごすことができた。

今回のキャンプを通じて感じたことについて、以下の3点を振り返りたい。一つ目は、2日間の子どもたちの成長である。二つ目は、持続可能な社会について考えることである。三つ目は、「みちとの出会い」についてである。

一つ目は、2日間の子どもたちの成長である。初めて班の子どもたちと学生が顔を合わせたオリエンテーションの時は、子どもたちはみんな緊張していて表情も硬く、なかなか子どもたちどうしで話すことができなかった。しかし、その後の活動を通して子どもたちの表情が少しずつ柔らかくなってきて、子どもたちどうしの間の緊張がほぐれていくのがよくわかった。最も印象に残っているのが、2日間の活動を振り返って各班の写真を



さよならの集いで活動班の写真

使って映像作品を作った時のことである。今までなかなか班の仲間と打ち解けられなかった子どもが、それまで見せなかったような笑顔で2日間の思い出の写真を眺めていたのだ。それを見た班の仲間たちも一緒になって笑い、みんなで2日間の思い出について語り始めたのだ。それまで子どもたちだけであのように楽しそうな表情で話している様子を見たことがなかったため非常に驚き、2日間での子どもたちの成長を感じた。上の写真は、さよならの集いで撮った活動班の写真である。仲間たちと打ち解けあった様子がよくわかる写真である。

二つ目は、持続可能な社会について考えることである。一日目のテーマ別フィールドワークでは、昔の奈良町の写真を手掛かりに現在の場所を探した。その活動の中で、「昔」のまちと「今」のまちを比較し、そこから「未来」のまちについて考えた。活動を終えてから、自分たちの“未来のまち”をどのようにしていきたいかについて子どもたちが書いた感想を見ると、昔の建物や風景が残っているまち、自然がいっぱいあるまち、平和で安全なまちなどという意見が多く見られた。大学内でのキャンパスフィールドワークや奈良町でのテーマ別フィールドワークで感じ、学んだことがよく表れている。「持続可能な社会」について考えることは少し難しかったかもしれないが、自分たちの身近なまちの歴史を通してこれからの社会について考える良いきっかけとなったのではないかと思う。

三つ目は、このキャンプのスローガンにもなっている「みちとの出会い」である。この「みち」とは、

「道」と「未知」をかけたものである。大学内の植物や戦争遺跡をまわったキャンパスフィールドワークや、奈良町の昔の写真を手掛かりに現在の場所を探したテーマ別フィールドワークなどで「みち・道」を歩き、また、2日間の様々な活動を通して「みち・未知」との出会いを経験した。自分自身もこのキャンプを通して、たくさんの「みち・未知」と出会った。今回、私はキャンプファイヤー班として、企画・運営に携わった。さまざまなゲームのリーダーやスタント、トーチトワリングなどを通して子どもにより楽しんでもらえるようにするため、キャンプファイヤーを盛り上げるために全力で取り組む中で、自分自身も知らなかった自分の姿に気付くことができた。たくさんの未知との遭遇を経験した2日間であった。

この2日間のキャンプを通じて様々なことを学んだが、それを大きく3つ分けると以下になる。大学内でのキャンパスフィールドワークや奈良町でのテーマ別フィールドワークを通じて「自然」と「文化」を感じ、そしてたくさん子どもたち、地域の人々、学校の先生方、そして企画・運営に携わった学生など、たくさんの「人と人とのつながり」の中でこのキャンプをつくりあげることができた。この「自然」「文化」「人と人とのつながり」の3つをあわせたつながりが持続可能な社会を作ること、自分たち自身がその担い手になるということを感じた。今回のキャンプを通じて得た経験を、今後の活動や生活に生かしていきたい。



## ESD 子どもキャンプで学んだこと

英語教育専修1回生 田中 晴日

私は今回の第3回 ESD 子どもキャンプに運営側である道草案内班として参加した。最初は活動班ほど子どもと関わることのできない裏方の仕事だろうなと思っていたが、活動班とは違った体験をして、色々なことがキャンプを通して学べた。その中から3つにしぼって述べたい。

第1に運営側の大変さを実感できたということ、第2に予想以上に子どもと関わる事ができたということ、第3に子どもを預かる、その責任の重さを感じることができたということである。

第1の運営側の大変さについては、子どもや子どもたちと一緒に楽しく班員の人と違い、自分たちが楽しませる側であるため、しっかりとわかってもらえるような工夫が必要だと痛感した。さらにゲームのルール説明であったり、構成一つとっても、しっかりとした準備があることがわかった。この体験を通して、先生たちも授業の中で言葉を選んだりメリハリを考えたりしていたのかと気付くことができた。

第2の子どもとの関わりについてであるが、正直、私はあまり子どもたちとは関われないだろうなと思っていた。しかし、オリエンテーションの劇に参加したり、運営の仕事をしている中で顔を覚えてくれた子もおり、子どもの方から話しかけられることもあり、うれしかった。何人かの子どもは班の垣根を越えて、すごく仲良くなることができた。そのため、とても楽しいキャンプになった。

第3の子どもを預かる責任とその重さについては、やはり子どもたちを預かるということは保護者の方の理解と信頼が大元にあるとわかった。ほとんどを大学生が企画するキャンプに子どもを預ける保護者の方々の信頼があってこそ、キャンプが成り立つのだと感じた。そして、保護者の方に安心して子どもたちを預けてもらえるように体調面や安全面での注意がやはり何より大切だなと思った。

私は今回述べたことのほかにもたくさんこのキャンプを通して学んだ。気付いたのは、そのどれもが教職に就くうえで必要なことだということである。子どもとの接し方、安全面や健康管理、そして子どもたちと関わる中での大変さや楽しさ、やりがいなどである。そういったことを今回学び、非常に自分自身にとっても実りあるキャンプであった。来年もそう思えるようなキャンプを、今度は自分たちが率先して作り上げていきたい。



ESD 子どもキャンプの看板

## 2014年ESDキャンプで私が学んだこと

社会科教育専修2回生 藤田 明希

2014年8月14日、15日に奈良教育大学で「ESD子どもキャンプ」が開催された。ESD子どもキャンプというのは、ユネスコクラブに所属している学生と奈良市内の小中学校に通っている子どもたちが主体となって行うキャンプのことである。主に大学内や奈良町散策などのフィールドワーク、キャンプファイヤーを行うキャンプである。

さて、このESD子どもキャンプで私は2つリーダーを任された。一つ目はアドベンチャータイムという一日目の夕方に参加者が行う、夕食を食べる店と銭湯をあらかじめ決めたり、調査しておいてスムーズに活動できるように取り組む班のリーダーである。二つ目は、キャンプ当日に子どもたちを率いる班のリーダーをした。初めてのことで戸惑うこともあったが、学んだことも多くあった。その理由を3つにまとめると、第1に計画は綿密にしなければならないこと、第2に下準備を徹底することの大切さ、第3に当日は周りとのコミュニケーションをしっかりとすることである。

第1の計画を綿密に練っておくことについては、特にアドベンチャータイムの下準備を行っているときに感じた。お店の調査をし始めたのは6月上旬で、2ヶ月も前から準備した。リーダーとして仕事を割り振ってメットなどを設け、班の人に仕事をやってもらったが、自分でも何をするのかのイメージが曖昧で、具体的な仕事の割り振りができていなかったためか、思うように仕事が進まなかった。途中で先輩と話し、イメージを具体的にできたことで、滞りが解決することができた。このことから、計画を頭の中できちんとイメージし、行動することが大切だと思った。

第2に下準備することの大切さについてである。今回、お店を調査するときにきちんと中まで入って調べてくるように言っていたが、インターネットで調べてしまった人がおり、実際の値段とワークシートに書いてある値段が食い違うというミスが起こった。準備段階では気づきにくいことかもしれないが、子どもを預かる立場として、お金に関してはシビアになるべきであるので、これを今後の課題としたいと思う。

第3の当日は周りとのコミュニケーションをしっかりとすることについては、どれだけ正確に計画を立てていても、絶対に計画通りにいかない場面があると思う。予測していなかった事態になった時、周りの学生と協力することにより、一人で考えるより、良い考えが生まれるので、周りとのチームワークを第一に考えるべきだと、学んだ。

以上3つのことをこのキャンプで学ぶことができた。今回のキャンプは、私にとって大きな成長をもたらしてくれた。



夕ご飯の時の集合写真

### 第3回 ESD 子どもキャンプ

教職大学院 M2 島 俊彦

2014年8月14,15日の2日間、市内のユネスコスクールに在籍する小中学生約50名を集い、本学を拠点とした第3回 ESD 子どもキャンプが実施された。

このキャンプは、「ESD(持続可能な開発のための教育)についてみんなで学び合う」「未来について考える活動を通して地域のつながりを見出す」「みんなで仲良く活動し、友情を育てる」の3点をねらいとしている。個人的にも今回のキャンプに参加するにあたって、大きく2つのねらいを持って臨んだ。

一点目は、後輩に繋げることである。今回のキャンプで私はキャンプファイヤー班のリーダーを務めた。班員のほとんどを1回生が占める非常にフレッシュな班であった。班員の大半が春の新生歓迎キャンプでキャンプファイヤーを経験した学生であったが、参加する側から創る側へと立場が変わることもあり、企画班の結成当初は不安要素が多かったことも事実であった。しかし、後輩たちが今年のキャンプファイヤーで活躍して成功体験を得られれば、来年以降も子どもにとって最高の思い出となるキャンプファイヤーを創っていってくれるチャンスになると考えた。「キャンプファイヤーってどんなものだろう?」という初歩的のところから始まり、テーマや役割、プログラムや学生スタンプの内容を皆で決



企画学生の集合写真

めた。定期的集まり、どうしたら子どもが喜んでくれるかを皆で考えた。その結果、当日はゲームや学生スタンプ、トーチトワリングやアंकロンを堂々とする後輩の姿をみることができ、非常に頼

もしく思うと同時に、来年は今年の経験を生かして、もっともっと良いキャンプファイヤーを創ってくれるだろうと確信した。自身にとって学生最後のキャンプで、今までの経験を後輩たちに繋げることができたのではないかと思う。

2点目は広い視野を持つことである。今回のキャンプでは班を外れ、運営学生という立場で参加した。過去2回は学生リーダーとして班に入って子どもと関わっていたので、今までとは異なって見えてくるものが多々あった。特に印象的であったのが、大学の先生方や参加していただいている現場の先生方の協力である。キャンパスフィールドワークやチャレンジタイムの際には巡回を行ってくれたり、テント建てが終わった後もテント内の風通しを確保するため作業してくれたり、キャンプファイヤーの井桁組みを指導してくださったりした。子どもや学生が安全に楽しくキャンプができるのは、陰で支えてくださる先生方の協力があってこそだということを改めて実感した。また、先生方の動きを間近に見ることで、自身の視野がぐっと広がった。

以上2点の個人的なねらいを持ってキャンプに臨んだが、振り返ってみて大方達成することが出来たのではないかと感じている。学生最後のキャンプは例年同様、自身にとって大変有意義なものとなった。過去3回の ESD 子どもキャンプで得たもの学んだことを、来年からは学校現場で生かしていきたいと思う。また、来年からは学生から現場の先生へと立場は変わるが、ESD 子どもキャンプに関わっていきたいと思う。

## ESD 子どもキャンプから学んだこと

理科教育専修1回生 田中 篤志

今年の ESD 子どもキャンプでは「みち～あなたとわたしとみちとの出会い～」をスローガンに掲げて、今まで知らなかった世界や自分自身の一面を知ることを中心にキャンプを運営してきた。一日目にはキャンパスフィールドワーク・奈良町の探検とキャンプファイヤー、二日目に朝散歩と DVD の作成・発表といった忙しく大変な日程だったが、それぞれに未知との出会いがあり、楽しさからあふれ出る自然な笑顔があった。

私にとってこのキャンプがかけがえのないものになった理由は3つある。第1に子どもの成長、第2に達成感、第3に自分自身の成長である。

第1の子どもの成長については、二日目の DVD の作成と発表の時に感じた。私は活動班に入って子どものすぐそばで様子を見てきた。私の班の子どもは恥ずかしがり屋な子どもが多くて、一日目のキャンプファイヤーの時は班の出し物をするにととても抵抗があり、私たち学生が主導して何とか班の出し物を完成させたという感じだった。しかし、DVD の作成の段階では子どもの中からより良いものを作りたいという気持ちが出てきて、子どもが主体となって学生はアドバイスにまわるというように変わった。

第2の達成感については、キャンプの締めであるさよならの集いで感じた。この時に私の班のある男の子が、キャンプを振り返っていて別れのつらさから泣き出してしまった。その時、私ももらい泣きしてしまい、大変だったことがすべてどこかへ飛んで行ってしまった。

第3に自分自身の成長についてはこのキャンプに向けて準備してきた過程にあると思う。私は今まで自分のために努力をすることはあっても、こんなにも他者のために一生懸命考え、時間をかけて準備をし、何かを作り上げるという経験をしたことがなかった。キャンプに向けての準備中にうまくいかなかったり、怒られたりしたときに子どものために頑張ろうと思った自分の存在に気付いたことは、未知の自分との出会いだったと思う。子どもを喜ばせたいという一心で頑張ることができた自分自身のことが少し好きになった。私自身が子どもとかかわることが本当に好きなのだと思えて実感できた瞬間でもあった。

以上の理由から、私にとってこのキャンプはかけがえのないものとなった。このキャンプにかかわることができて本当に良かったと思う。



今回のキャンプのスローガン

### 第三回 ESD 子どもキャンプ

社会科教育専修4回生 二階堂 泰樹

平成26年の8月14日から15日の2日間にかけて、今年で3回目となるESD子どもキャンプが行われた。私自身、2回目の参加だったため、去年の自分と比べることのできるキャンプとなった。去年の反省点をもとにしながら、今回のキャンプで学ぶことのできた点について、行動力、思考力、コミュニケーション力の3つの視点から振り返っていききたい。

まず初めに、行動力であるが、この力については私自身このキャンプを通して身についたと感じているし、子どもたちにも私が身につけてほしいと考えていたものである。私はこのキャンプでは行動で示すことを心掛けてきた。それは、去年のキャンプ時に、いまひとつキャンプに乗りきれない雰囲気を作ってしまった反省からである。だからこそ、今年は子どもたちの前でとことん楽しみ、口だけでなくやって見せることなどを心がけた。初日の朝はまだぎこちなかった班の子どもたちもキャンパスフィールドワークから帰ってくるころには歳の違いを超えて仲良くなっていた。班が元気になるにつれて、素の自分を見せ始める子どもたちは何度見ても嬉しく思える。

次に二つ目の、思考力については、今回のキャンプの大きな反省点となった。活動中、私たちの班では子どもたちが疑問に感じたこと、興味を持ったことに対して行動できる時間を何度もとった。しかし、次に何をしなければならないのか、どれだけ時間をかけてよいのかなどを子どもたちに十分考えさせることはできなかった。時間が迫ると注意をして時間を意識させたり、次にしなければならない行動を聞かれたりしたときに答えてしまうといった場面が多くあった。そうなってしまった要因としては、私自身が余裕を持てていなかったことが大きい。行動することを心掛ける一方で、キャンプ初参加の1、2回生の班長を任されたことに対して気負っていた部分もあった。今思えば、「自分がやらなければ」という思いは協力して良い班を作ろうとしている学生リーダーに失礼だったと反省している。

そして最後に、コミュニケーション力である。今年も去年以上にコミュニケーション力の大切さを痛感し、また私自身、去年よりもこのキャンプを通して学ぶことができたと感じている。今年のキャンプはスタッフ側に初参加の人が多くいたので、名前を覚えるだけでも一苦労だった。けれど、ほとんど初対面な人であっても、子どもたちを楽しませることや、子どもたちに学んでもらいたいことなど目的が同じであれば、気兼ねすることなく仲間として行動できた。4回生となり、周りのほとんどの学生が年下になったが、いい刺激や影響は絶えず受け続けている。多くの人とのかかわりの中で、自分を知り、自分はいくらまでできるんだと、胸を張って言えるようになることが大切なのではないかと私は考えている。

2日間を通して、自分の至らない部分を知り、ユネスコクラブ一人ひとりの輝いている姿を見た。去年と相も変わらず助けられっぱなしの私だったが、キャンプが終わってたくさんの仲間たちと笑顔でいられたことが嬉しくてたまらなかった。そして、子どもたちと密に過ごした2日間はかけがえのない夏の思い出となった。「来年も来る！」と言ってくれた子どもたちに来年は今年よりも良いキャンプを楽しんでもらえるように、反省すべき点、去年と比べて成長していなかった点をこれからの様々な経験の中で磨き続け、来年も何らかの形でこのキャンプに関われたらと思う。



ふり返り後、お別れの集合写真

## 積極的に動くことの大切さ

特別支援教育専修 1 回生 麻生紗希

ESD 子どもキャンプは平成 26 年 8 月 14 日、15 日の 2 日間を通して行われた。ESD とは、E ducation for S ustainableDevelopment の略称であり、持続可能な開発のための教育と訳される。ESD 子どもキャンプは ESD を学びあい、過去現在未来をみつめてこれからどんな未来を創っていきたいのかを考え、地域とのつながりを見つけ、同時にみんなで仲良く友情を育てるという活動内容であった。

今回の活動を通じ、私は積極的に動くことの大切さを改めて学んだ。その理由となった出来事が 3 つある。第 1 に出会いの場面である。第 2 に学生スタッフの司会の場面である。第 3 にスタントの場面である。

第 1 の出会いの場面であるが、子どもたちも私自身も不安や緊張で表情がかたかった。そんな状態を溶かしてくれたのが、アイスブレイキングであった。学生らが積極的に動くことで子どもたちに少しずつつながりも笑顔が生まれてきた。

第 2 の学生スタッフの司会の場面である。最初は学生が前で司会進行を務めていても盛り上げが少なく、そのことがより子どもたちにとってだけでなく、私たちスタッフにも緊張をうみだしていたのかもしれない。スタッフどうしで固さに気付き、指摘し合い、みんなが拍手や言葉で場を盛り上げるように実践していくと、みるみる子どもの表情が明るくなっていくように感じられた。

第 3 のスタントの場面である。どの活動班も、企画班も元気いっぱい、はずかしがらず、大きすぎるくらいの声で、そして何より楽しく発表しているのをみて、その大切さを痛感した。私自身も、初めての企画班でのスタント発表に、場がしらけないか、趣旨が伝わるのか、とても不安だった。思い切って発表することで自分の殻を破ることができた気がした。キャンプファイヤーのスタントを終えた子どもたちも、始まる前は緊張で固まっていたが、終わったあとも子どもたちから「一番楽しかった、やって良かった」との感想を聞かせてくれて、とてもうれしかった。

以上の理由から、私は積極的に動くことが大切だと改めて感じた。これから、どんな不安なことや、初めて体験することでも、恐れず自分自身が積極的に動いていける人間でありたいと思う。



1 班の集合写真

### 第3回 ESD 子どもキャンプ レポート

社会科教育専修 M1 藤間 大輔

第3回 ESD 子どもキャンプでは、小中学生を募集し、大学生とグループを組みフィールドワークやキャンプを実施した。その目的は、子どもたちに ESD についての体験を通して学んでもらい、先人たちが築き上げた建物、平和、環境などを未来に継承する当事者意識を養うことである。



振り返りの一場面

世界的な食糧危機や地球温暖化、宗教対立や貧困などにより、各国では持続可能な開発に今力が注がれている。一方島国であり、国

境線で外国に接していない日本は、戦争や貧困を自覚しにくく、後先分らずに集団的自衛権を閣議決定してしまった。不安定な状態の日本を将来担うのは今の子どもたちや私たちで、ESD 教育は今後の日本の教育には必要不可欠なものである。今回のキャンプでは ESD の必要性を、実践を経験したことで改めて認識できた。また新たな見地も発見でき、今後の ESD の実践に必要なものを自分なりに考えられた。

今回のキャンプを経て、ESD 実践には3つの留意点が必要であると考えた。一つ目は、現状の世界や国内の把握、二つ目は教員やスタッフの ESD に対する概念の統一、三つ目は子どもたちに活動を楽しませるだけで終わらせないことである。

一つ目の現状の世界や国内の把握は、私たち教育大学生が行う模擬授業で言えば、導入の部分のようなものである。導入は、子どもたちの関心を引き寄せ、授業の目的を理解させる大切な要素である。故に、導入で世界や日本の現状を分かりやすく解説し、明確な目的を定めた上で、ESD キャンプをすればもう少し効果的な教育ができたのではないかと考えた。ESD は概念が広大なため、具体的な目的を定め難い。そのため、今回のキャンプでも、どのような目的でこのような活動を実施するかが子どもたちに伝わりきらなかった。よって班の最後の感想発表のとき、子どもたちから「楽しかった」の声しか聞けず、子どもたちが何を学んだかが全く分からなかった。改善策として、例えばだが、日本が京都議定書で温室効果ガス 6%削減を目指し、結果 8.2%の削減に成功したことを最初に伝える。そして子どもたちに、今後このような環境維持をしていくには何が必要か、今日の活動を通して考えようという。これにより、キャンプの明確な位置づけや目的ができる。この改善策は小中学生にとっては難しい内容となり、理解されにくいきらいがあるかもしれないが、ある程度有益であると感じる。

二つ目は、教員やスタッフの ESD に対する概念の統一である。第3回 ESD 子どもキャンプ終了後、班ごとに集まり反省会を行った。その時、班員のほとんどが ESD に関して漠然とした考えしか持っておらず、キャンプの日程をこなすのに精一杯といった状態だった。私も同じで、しっかりとした ESD の考えを持っていれば、子どもたちに ESD をわかりやすく教えられたと、勉強不足を悔やんだ。改善

## ESD 子どもキャンプで経験したこと

英語教育専修1回生 平田 甲矢乃

今まで私は、SNSの普及のせいで人と直接関わったり外で遊んだりする機会の少ない最近の子どもは、精神的に幼い子が多いという偏見をもっていた。私には、人は人との直接的な関わり合いから成長するのだという考えがあるからである。しかし、今回のキャンプで考えが変わった。

私が学んだことは3点である。一つ目に子どもは素直であること、二つ目に子どもは自分のしたことに鏡のように反応をかえすということ、三つ目に自分の体力には限界があるということだ。順をおって説明する。

まず、子どもは素直で純粋である。私がああだと言えれば信じてくれる。子ども自身、若くて経験が少ないからなのだろう。実際、私も知らない事にでくわすと、何でも信じてしまう。だからこそ、彼らに教育を施す教員は正義感があり、常識のある大人でないといけないと思った。

次に、子どもはまるで写し鏡である。私が思い切ってふざければ楽しそうにのってくれた。私が疲れてうとうとしていると、「ちゃい、大丈夫？」と返してくれた。一方で、小学生でも5年生にもなると気遣いをするのだと感じた。眠そうにしている私のことはそっとしておいてくれたのだ。大人側は、彼らがのびのびと過ごせるように自分に余裕があるように見せていなければいけない理由を実感した。

最後に、自分は体力がないということである。まだいけると自信過剰になり、前日までのスケジュールを詰め込んでしまった。そして、当日一日目のキャンプファイヤーで激しく動いて、二日目はまるで元気が出なかった。

結果として今回は、子どもは自分が思っているよりもずっと繊細であり、しかも元気な彼らと一緒にいるには、保護者側に立つ自分はさらに元気でいなければいけない。余裕をもたねば視野は狭くなってしまうので臨機応変に子どもと接しなければいけない。以上のことを今回のキャンプで学んだ。



キャンプ参加者の集合写真

### 第3回 ESD子どもキャンプ

音楽教育専修1回生 板倉 果琳

ESDとはEducation for Sustainable Developmentの略であり、環境、貧困、人権、平和、開発といった、現代社会の様々な課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そして、それにより持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動のことである。

私が今回のESD子どもキャンプで学んだことは、3つある。一つ目はそれぞれの役割の大切さ、二つ目に子どもたちの成長、三つ目が時間の使い方である。

最初はそれぞれの役割の大切さである。私は今回、活動班に入らずに、裏方の仕事をしていた。具体的には、フィールドワークの時に給水ポイントに立って給水を促したり、様々な準備をしたりなどである。どちらかという、裏方の仕事は体力的にきつい部分が多いように見受けられた。また私は、夕食時に活動班に参加した。活動班では、子どもたちを一番に考え行動しているので、精神的にもきついところがあった。それぞれの役割に違った難しさがある。しかしそのおかげで、一つの大きなものが作り上げることが出来たのだと思う。

次に子どもたちの成長である。今回のキャンプで、私は子どもたちに楽しんでもらえたらそれだけで良いと思っていた。しかし、私の想像を超える以上に子どもたちはキャンプを過ごすうちにどんどん積極的になり、顔が和らぎ、笑顔が増えていた。私がそれに気づいたのは、2日目の最後の各班での活動発表をしているときである。ムービーの写真をみると、最初来たときよりも楽しそうで、班員が仲良くなっているように見えた。また、キャンプファイヤーのときよりも活動発表の方が恥ずかしがらずに発言が出来ていた。これは活動班に入って活躍してくれたユネスコクラブのメンバーのおかげでもあるが、子どもたちの成長もある。

最後に時間の使い方である。今回のこのキャンプでは少し時間に余裕がなかったところがある。昼食時間とテント設営の時間を一緒にしたのがその例である。確かに子どもたちの食べる速さには個人差があるが、一緒にしてしまうとテント設営の時間がなくなる可能性がある。実際にそうであった。また、夕食と入浴の時間が短かったように感じた。夕食にも入浴にも時間がかかるし、歩いて学校まで戻るとなると結構な時間がかかるが、2時間しかなかった。入浴後、急いでいたので髪の毛を乾かせない状態でもあったと聞いた。風邪をひく可能性があるので、もう少しゆとりを持った方が良さだろう。

以上のことより、私はキャンプを通して多くを学んだ。私たちにとっても子どもたちにとっても実りのあるキャンプであった。次の機会があるならば、ぜひ参加したいし、今回の反省を踏まえ、より良いものを作りあげたい。



キャンプ時の集合写真

## 色々な「みち」との出会い

社会科教育専修2回生 米澤 瑞綺

2014年8月14・15日に奈良ASPネットワーク第3回ESD子どもキャンプが行われた。このキャンプは奈良教育大学の学生が中心となって企画・運営している。また、地域の小・中学校や、お店などと協力して企画・運営されている。今回も椿井小学校に休憩場所として椿井ホールを借りたり、一日目の夜ご飯や銭湯でならまちのお店を利用したりした。今回のキャンプは私にとって去年に引き続き二回目の参加となった。企画時は昨年同様オリエンテーション班で企画に携わったが、キャンプの時は去年と異なり、班のリーダーとして子どもたちと接することとなった。去年の経験を活かしながら活動したのだが、その中でいくつか新たに考えたことを述べる。

一つ目は昨年度と異なり今年度は運営班が設置されたことである。二つ目は班のリーダーとしての自分の短所である。三つ目は2回生という真ん中の回生の立場の難しさである。

一つ目の運営班の設置についてであるが、昨年度までと異なるシステムのため「未知」の部分が非常に大きく、企画の段階からかなり不安に感じていた。理由は二つある。一つ目は、キャンプの時に班活動に運営班の人間が参加できないことで運営班のモチベーションが下がるのではないかとということであった。二つ目の理由は、運営班には1回生が多くキャンプ未経験者が裏方という難しい仕事をこなせないのではないかとということであった。しかし、実際にキャンプが始まってみると運営班の人間も子どもと接するタイミングが多々あり、とても生き生きした表情でキャンプに参加していた。また、キャンプの前々から行われていた綿密な打ち合わせのおかげで運営班によるキャンプの運営もとてもスムーズに行われた。よって、運営班のESD子どもキャンプへの導入は「未知」の試みではあったが成功であったといえる。

二つ目のリーダーとしての自分の短所であるが、雰囲気作りが苦手であるということが最大の短所であるといえる。キャンプファイヤー後の一日目を振り返る時間や最後の班での振り返りの時間に落ち着いた雰囲気を作り出すことができなかった。来年度のESD子どもキャンプでは、雰囲気づくりをうまく行うことができるように子どもの興奮の鎮め方などを学んでいこうと思う。今回のキャンプでさらに指導者の難しさを実感し、いろいろな課題に気付くことができた。教育者としての「道」に一步近づくことができたと思う。

最後に三つ目の2回生という立場の難しさであるが、これはキャンプを実際に行っているときに感じた難しさと、計画時での難しさの2つがあった。前者は、キャンプの班に院生の方と4回生の方がいるなかでリーダーをやらなければならない難しさであった。まだ、そのような上回生の方にはリーダーとしては全然及ばないのに、その方々にも指示を出さなければならず非常にプレッシャーを感じながらのキャンプであった。指示を子どもに出すだけでなく、学生を含め班員全員に指示を出すことに、プレッシャーを感じ、とても難しいことであった。後者の計画時に感じた難しさは自分がどれだけキャンプを引っ張ってよいのかわからないことから感じた難しさであった。二回目のキャンプなので、キャンプのことは大体わかっていて気づくこともあった。しかし、指導者や企画者としてはまだまだ未熟者なのでわからないものも沢山ある。このような中途半端な立場でどのくらいキャンプに貢献できるのだろうか迷いながらのキャンプ準備であった。実際は迷いながらも先輩のアドバイスを聞きつつ自分なりに意見を言いながら企画を進められたので、問題はなかったのであるが気持ち的にはいつも迷いがあった。来年度は、今回の経験を生かして2回生の心のケアも行っていきたいと思っている。

今回のキャンプは難しいことも昨年のキャンプ以上にあったが、それ以上に昨年よりも楽しく学びの多いキャンプになったと思う。今回の経験をキャンプ以外の活動にも生かしていけるように積極的にユネスコクラブ内でも、それ以外でも動いていきたいと思う。非常に「満ち」足りた素敵なキャンプであった。来年もよりよいキャンプを行っていけるように今回の反省を踏まえて頑張っていきたい。



今回のキャンプテーマである「みち」の紹介



集合写真

## 2度目のESD子どもキャンプを経て

英語教育専修 2回生 北側 瑞歩

私は2014年のESD子どもキャンプは2回目の参加であったが、去年のキャンプと比べると異なる点が多々あった。主にそれは、キャンプ当日は子どもたちの班に入るのではなく、立ち番や巡回などのいわば裏方となる仕事を請け負ったこと、当日の奈良町のフィールドワークで企画のリーダーをしたこと、1回生という後輩ができて、先輩として指示しなければならない立場になったことという3点である。去年とは違う、班には入らない裏方という立場で挑んだESD子どもキャンプだが、私のキャンプの目標は「子どもと関わる」ことだった。

私は今年度のキャンプで学んだことは3点ある。それは、裏方の仕事は大変であるが重要なものであるということに改めて気づいたこと、企画を皆で考え作り上げることの楽しさを学んだこと、人を動かすことの大変さである。

まず、裏方の仕事は子どもの安全や体調を考えて行動しなければならなかった。それを考えるときは天候や時間など様々なことを考えなければならなかったことと状況に応じて何を優先するべきなのかを考えて行動したり指示を出したりしなければならなく大変だった。しかし、子どもが帰ってきたときにお茶のジャグが置かれていること、昼食のときにお弁当がすでに教室に届いていること、横断歩道などの危険個所での誘導をすることはプログラムをスムーズに行うことや子どもの安全面及び体調面に対して欠かすことのできない大切な役割であると学ぶことができた。そして、班のリーダーとして入ることはできなかったが、子どもに体調を聞き、楽しんでいるのかどうか、何が楽しいのかを聞くことで子どもたちと関わるという目標を果たすことができたと思う。また、そのような点に気を配りながら行動できたということは去年より現場の教師に必要な力を身に着けることができたのではないかと思う。

次に私が奈良町のフィールドワークの企画を作るうえで学んだことは、皆で作ることの楽しさと難しさである。企画を作ることの難しさはユネスコクラブでの1年の活動を通してわかっており、子どもキャンプでフィールドワークの企画を納得できるものにできるのかという不安は大きく、先輩に頼ったところも多々あったが、フィールドワークの企画と一緒に作ってくれた仲間と昔と今の奈良町の写真を比べるために実際に探して歩いたり、地元の人に聞いて繋がりを作ったり、ワークシートを皆で作ったことはとてもやりがいがあった。しかし課題として見えてきたことは、私は人を動かすことが下手であるということである。一緒に作業ができなかった人との情報を共有することができないことと、進めてほしい仕事の指示をすることが遅いという課題があるので来年は後回しにしないことを課題としたい。

最後に私は人を動かすことや注意することが下手であることに気付いた。今年から先輩という立場になったが、初めてのキャンプでわからないことが多い後輩に対して仕事の指示をすることができなかった。

自分が状況を把握できていないときや、つぎの予定がわかっていなかったことが多かったからである。これからは後輩に指示や注意ができるように意識して企画などに臨みたい。

私は班のリーダーではなく子どもと関わることは少なかったが、去年とは違う視点で子どもを見ることができた。また、自分自身のことも指示される側から指示する側が変わることで普段ではわからない課題を見つけることができた。人を動かせるリーダーになれるように、企画を作る経験をさらに積んで来年のキャンプに挑みたい。



ESD勉強会の様子

## ESD子どもキャンプでの体験を通じて

国語教育専修1回生 澤田 夏美

2014年8月14,15日に奈良教育大学とその周辺で第3回ESD子どもキャンプが実施された。「みち」～あなたとわたしとみちとの出会い～をスローガンに、学生約50人、小学5年から中学3年までの子ども40人と先生方を加えて100人を越える参加者が集まった。

このキャンプでは私はキャンパス探検の担当となり、学内の植物や遺跡を子どもと探す、という内容を作った。また、当日は子どもたちと行動を共にする班活動には参加せず、「みちくさ案内班」という名の運営側として裏方のサポートなどを行った。その中で得た、学んだことを3点挙げようと思う。

まず、1点目は経験の偉大さだ。私はユネスコクラブに入りたての1回生で、先輩が1点に向かって周囲に的確に指示を出しつつ動いている中、何もわからないままただ指示に従って動くだけで精一杯だった。もちろん、一度の経験があったからといってそうなれるわけではなく、経験だけが理由ではないだろうが、キャンプの経験ではなく、人生において、経験は偉大であると感じた。

また、2点目は自然の影響力を思い知ったことである。8月中旬の日差しも強く暑い中のキャンプで熱中症への対策が重大であったこと、1日目の活動を終えテントで就寝中に激しい雨が降り翌日の活動への影響が心配されたこと、朝散歩の活動で木陰の涼しさを感じたことなど、様々な箇所ですれ、自然について考える機会があり、その影響力を改めて感じた。

そして、3点目は、私自身のことになるが、前に出ることにはほんの少しだが慣れたように思う。元来私は大変消極的で、人の前に立ち喋ることが極端に苦手な性格であるが、今回の活動で、アイスブレイクの手伝いやキャンパス探検班での役割などから何度か大勢の前に立つ機会があり、そのおかげで、緊張感などに慣れたと思う。次にそのような機会があれば、今までの私よりも少しは余裕を持てるように成長できたのではないかと思った。私個人にとってはこの人の前に立ち喋ることに慣れることができた収穫は大変大きかった。もちろん事前準備や練習よりも上手いかなかった点は多々あったが、一応の成功をみせられたことが収穫に繋がったと考える。

このように、様々なことを考え、感じた2日間のキャンプであった。このことは、ユネスコクラブに参加し、このキャンプに向け準備し、それを実行したことは、私にとって大いにプラスになる経験であったと言える。前述の通り私はただ指示に従うことに精一杯で、至らなかった点も多かった。そういった反省を踏まえ、今後の活動に活かしてゆければよいと思う。



キャンパス探検の導入の様子

## この夏1番の思い出

特別支援教育専修4回生 濱田 茜

2014年8月14日・15日に「第3回ESD子どもキャンプ」が開催された。私は昨年11月にユネスコクラブに入部したため、今回のキャンプが最初で最後のESD子どもキャンプとなった。キャンプのスローガンは「みち～あなたとわたしとみちとの出会い～」。天気にも恵まれ、それぞれが活動を通して、新たな学び、新たな出会いを発見し、「未知との遭遇」を経験した。

さて、私は今回の子どもキャンプは自分のこの夏1番の思い出になったと考える。その理由は3つある。第1に子どもたちの成長を1番近くで見ることができたこと、第2にユネスコクラブ員の尊敬できる部分をたくさん見つけることができたこと、第3に「楽しかった」「勉強になった」という気持ちだけでなく、「悔しい」という気持ちを持つ自分に出会うことができたことである。



最後のスタンプ打ち合わせ時。

テントの設営もスタンプを考えることも、時間がかかったが、そのような活動を通して班の仲が深まった。

に思う。私たち学生が無理につなげようとしなくても、自分たちで声を掛け合い、自分たちで行動に移す。積極的な子どもたちの行動に何度も助けられた。1泊2日という短い期間の中で、このような成長を学生リーダーとして最も近いところで見られたことが、今回のキャンプでの大きな収穫であったと思う。

第2のユネスコクラブ員の尊敬できる部分をたくさん見つけることができたということであるが、これは私がキャンプ前日の打ち合わせ時に目標として書いた「振り返ったとき、ユネスコクラブ員一人ひとりの頑張っていた姿を思い出せるようなキャンプにしたい」ということにもつながっている。今回のキャンプでは先輩方はもちろんのこと、同回生や後輩たちの頑張っている姿もとても印象に残っている。いつもふざけて話しているような仲間も、まっすぐな姿勢で子どもたちと向き合い、各企画を引っ張っていた。また、私の班を含め2回生がリーダーを務めた班も多数あったが、みんな後輩と思えないほどしっかりして、責任感を持って務めていたと感じている。また、子どもキャンプ初参加となる1回生も

第1の子どもたちの成長を1番近くで見ることができたということであるが、これは班活動を通じて感じたことだ。私が担当した班には小学6年生から中学2年生まで、個性豊かな男女5名がそろった。仮に全員が同じ学年で同じ学校であったとしても、互いに関わることがなさそうなほど、タイプの異なるメンバーが集まった。1日目朝に集合した当初はお互い話すこともなく、名前を呼び合うゲームも上手くいかず、これからの活動が心配になったが、キャンパスフィールドワークやフィールドワーク、夕食銭湯などの活動を通して、1つの班としての団結力が生まれたよう

各企画で個性を発揮し、子どもたちの為に奮闘していたと思います。キャンプを振り返ったとき、そのようなユネスコクラブ員の活躍と子どもたちが一生懸命活動する姿が一番に思い浮かぶ。そこで改めて「今回のキャンプに参加して良かった」と感じる事ができた。

第3の「楽しかった」「勉強になった」という気持ちだけでなく、「悔しい」という気持ちを持つ自分に出会う事ができたということであるが、冒頭に書いた通り、私にとって今回のキャンプが最初で最後のESD子どもキャンプとなった。その中で、「あのときもっとこうしたら良かった」と後悔することもある、先輩や班長の動きを見て、「こういう風に動けばいいんだなあ」と学んだこともあった。それらを来年、同じESD子どもキャンプという舞台でリベンジすることができないということを感じている自分が居る。キャンプを終えて自分が「悔しい」という感情を抱くとは、キャンプ前には想像もつかなかったので、それほど自分にとって思い入れのある、濃い2日間だったのだと改めて感じた。

以上の理由から、このESD子どもキャンプ2014が私自身のこの夏一番いい思い出になったと考える。たくさんの成長を見せてくれた子どもたちとの出会い、ユネスコクラブ員たちの新たな一面との出会い、そしてキャンプ後の自分自身との出会い。すべての出会いが「未知」であり、これからの自分の成長と大きくつながる出会いであった。これからもこのキャンプでの思い出を忘れることなく、ユネスコクラブ員とともに成長していきたいと思う。



さよならの集い後、最後の1枚を5班のポーズで。

1日目のオリエンテーションのときにはこれほど団結できると思わなかった。

### 第3回 ESD 子どもキャンプに参加して学んだこと

数学教育専修3回生 濱崎 千華

8月14-15日、奈良教育大学において第3回 ESD 子どもキャンプが行われた。私はユネスコクラブ員として3回目の参加である。今回のキャンプのねらいは、未来について考えるフィールドワークを通して地域のつながりを見出し、ESDについてみんなで学び合うこと。そして、大学生と子どものみんなが仲良く活動し、友情を育てることであった。

さて、私はこのキャンプを通して学んだことが3つある。一つ目はチームワーク、二つ目は後輩の指導、そして三つ目は一緒に楽しむことだ。

まず一つ目のチームワークであるが、これは子どもたちから学んだことだ。私の班には、暑い中のフィールドワークで体調を崩してしまってキャンプファイヤーに参加できなかった子がいた。一緒にスタントの内容を考えたのに班全員で披露することができないのはとても残念だと思った。しかし、スタント（コント）の練習をしていた時、その子が主役のコントはどうするか悩んでいると、ある男の子が「俺がやる！」

と言ってくれた。参加できないからその子のセリフもなくしてしまうのではなく、その場になくても一緒にスタントをやっているのだという意識で助け合って作り上げることができた。また、振り返り発表会では、みんなより早く帰らなければならない子がいて、その子のセリフを誰が言うかという話になったが、立候補ですぐに話す人が決まった。このような子どもたちの積極的な姿勢、欠けてしまった部分をみんなで補おうとする態度から、チームワークの大切さを学ぶことができた。学生リーダーが誘導して何かさせるということがほとんどなく、今年の班活動は今までで一番うまくできたと思う。

次に二つ目の後輩の指導である。私は今回が三回目の参加になるが、今までで一番学生スタッフの参加が多かった。ユネスコクラブ員がサークルの勧誘活動を頑張ってくれたおかげで1回生がたくさん参加してくれたのだ。私は今までのキャンプでは、先輩に頼って動くことばかりで、後輩に何か指導することはほとんどなかったように思う。だからこのキャンプでは、1回生が「来年も参加したい。ユネスコクラブ続けたい。」と思えるように企画書作りやレクリエーションの練習を頑張った。人に何かをさせるためにはまず自分が見本となって動かなければならない。口先だけの頼りない先輩には誰もついていけないのだ。これから先輩という立場で下回生と接することが多いと思う。このキャンプで学んだ後輩の指導法を生かして、みんなが頼れる先輩になれるように努力していきたい。

最後に三つ目の一緒に楽しむことである。このキャンプが終わった後、班の子が「大学生の人の仲の良いところや楽しそうにしているのを見て自分も楽しいな、また会いたいなと思えた。」と言ってきて、本当に嬉しかった。自分だけ楽しめばいい、子どもが楽しんでもくれさえすればいいという考えではなく、自分も子どもと一緒に楽しむことが何より大切だと学んだ。後輩の指導でも言えることで、自分が楽しんでいる姿を見て後輩も安心して楽しんでもくれたら嬉しいと思う。反省会で、キャンプ中に子どもには関係のない大学生の内輪話で盛り上がってしまう時があったのが私の班の反省点の1つだった。次回は子どもたちと一緒に盛り上がる場を班活動の中で増やしていきたいと思う。

以上の3つのことを学んだ。このキャンプで私は、子どもと一緒に未来について考えることができただけでなく、自分の知らなかった新しい自分を見つけることもできた。来年もよりよいものが作れるように頑張りたい。キャンプを支えてくださったみなさん、ありがとうございました。



心を一つにしたキャンプファイヤーの写真

## あとがき

奈良教育大学次世代教員養成センター 中澤 静男

今年はいく回目の奈良ASPネットワークESD子どもキャンプであった。キャンパスにテントを設営してキャンプをしているのは、たぶん本学だけの取組だと思う。キャンパスの位置する状況を活かした特色ある取組だということであろう。一年目は、すべてを新しく開拓する必要があり、地域の現職教員の多大な協力を得て実施できた。キャンプの企画・運営への学生の関与は20%程度だったと思う。ところが、三年目の今回は、ほぼすべてを学生が担うまで成長したことは特筆すべきことである。2014年は国連ESDの10年の最終年度であり、11月に岡山市、愛知県・名古屋市ではESDに関するユネスコ世界会議が開催されたが、そこではESDは今後ますます重要であり、その推進のカギを握るのは教員であるということが確認された。ESD子どもキャンプの企画・運営と次世代を担う教員の教師力育成にはどのような関係があるかを次の3点から考えてみたい。一つ目が立場の変更、二つ目に先見する力、三つ目がESD指導力である。

一つ目の立場の変更について、学生のレポートにあるように、高校生までは与えられる側としてキャンプに参加していたのが、企画・運営する側として参加することで、指導される側から指導する側へと視点が変わる。これは学生・生徒の立場から教員の立場への変更と同じである。この立場の変更を通じて、教員になるという自覚とともに、学びに火が点くことを期待したい。

二つ目の先見する力についてである。今回のキャンプも天気には悩まされたが、屋外での活動が中心になるキャンプでは、天候による活動内容の変更や熱中症などの子どもの体調への配慮など、臨機応変な対応とそれを見越した準備が求められる。例えば、活動班では意義ある学びにするための布石が必要であること、運営班では活動中の子どもの様子を観察しながら、次の準備をするという先を読む力の必要性を感じることができたのではないと思う。これらは、教員になったときに常に求められる力である。学級経営や生徒指導は事前の指導が重要であり、先手を打つためには先見できる力を身に付けておいてもらいたい。

三つ目のESD指導力である。このキャンプは他のキャンプとは違い、ESDの体験的理解が目的である。そのために、ESDの視点を踏まえたプログラム作りが求められる。今回の、キャンパス内の自然と歴史を探るプログラム、奈良町の今と昔の比較を通して、町は変化していくものであり、自分たちが町づくりの当事者であるということに気づかせるプログラム、奈良公園の朝の自然と仲間づくりを感じさせるプログラムは、どれもESDとして秀逸であった。このようなプログラム作りを通して、ESDの視点に立った教材開発力が身に着くものと期待している。

今、ESDを持続可能な取組にすることが問題になってきているが、ESD子どもキャンプは、テントを購入した時点で、その問題の解決に大きく前進している。しかし、テントがあればキャンプができるというのは大きな誤解である。この取組にご理解ご協力いただいている学長を始め本学教職員の皆様、運動場を提供していただいている附属小学校の皆様、そしてテントサイトだけでなく、トイレやシャワー室を開放していただいている附属中学校特別支援学級の皆様には感謝したい。参加してくれている学生の皆さんも、周囲の協力がなければできない取組であることを、今一度心に留めていただきたいと思います。



なっきょんも登場したオリエンテーション

# みち

~あなたとわたしと  
みちとの出会い~

今から始まる ぼくたちのアドベンチャー  
ワクワクとドキドキが まっている

一本道 でこぼこ道 まわり道  
道草にも良いから 歩き出そう

元気いっぱい 笑顔満開 ぼくたちは  
明日へ一歩 ふみ出す  
前へ走れ 勇気出して さあいこう  
まだ 知らない 未来へ

2014年 奈良ASPネットワーク

# 第3回 ESD子どもキャンプ

スローガン

「みち」

～あなたと私とみちとの出会い～



学校		学年	
名前			

**平成 26 年度 奈良教育大学  
地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた  
持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト  
奈良ASPネットワーク 第3回 子どもキャンプ報告書**

平成 27 年 3 月

国立大学法人奈良教育大学  
〒 630-8528 奈良市高畑町  
次世代教員養成センター ESD・教材開発領域  
TEL・FAX 0742-27-9177

